

横内北窯跡群 1号 下庄遺跡 上東遺跡

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第12集

倉敷埋蔵文化財センター

2007.3

序

倉敷市教育委員会では、昭和54年度から埋蔵文化財の専門職員を配置し、倉敷市内における埋蔵文化財の調査及び保護保存等に取り組んでまいりました。また、平成5年には埋蔵文化財行政の拠点施設として、倉敷市福田町のライフパーク倉敷内に埋蔵文化財センターを設置し、埋蔵文化財保護に向けて一層の取り組みを進めてきているところです。

この間、圃場整備に伴う大規模な発掘調査をはじめ、道路建設や民間の住宅開発などに伴い大小各種の発掘調査を実施してまいりました。このたび本書で報告いたします横内北窯跡群1号は昭和59年度に、また下庄遺跡、上東遺跡は平成12年度に実施した発掘調査です。これら3遺跡の発掘調査につきましては、いずれも農道や市道など道路の改修に伴い実施された比較的小規模なものであるため、今回の調査の成果をまとめて、一冊の報告書として上梓することいたしました。

横内北窯跡群1号の発掘調査については、1号窯跡に伴うとされる灰原から大量の須恵器や瓦が出土しました。これらは、調査例の少ない奈良時代末期の窯跡からの出土資料として注目され、備中地方において唯一継続して生産が行われた玉島陶窯跡群の実態を解明する上で貴重な資料となるものです。また、下庄遺跡の調査では弥生時代後期の土坑や溝が検出され、さらに上東遺跡の調査では多くの土器とともに弥生時代中期から後期及び中世に至るまでのピット群や土坑群、溝などが確認されました。これらの調査により互いに近接する位置にある下庄遺跡と上東遺跡との関係や集落の変遷、広がり等を考える上で、貴重な資料を得ることができました。

本書にまとめました内容が、今後の倉敷市における埋蔵文化財の保護保存の資料として活用されますとともに、こうした貴重な歴史遺産を広く市民の方々に知っていただき、学術研究や生涯学習におきましても活用いただけましたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、現地での発掘調査から出土資料の整理にいたりますまで、ご理解ご協力を賜りました関係各位に対しまして、衷心より感謝申し上げます。

平成19年3月31日

倉敷市教育委員会

教育長 吉田 雄平

例　言

1. 本書は、昭和59年度に実施した横内北窯跡群1号、平成12年度に実施した下庄遺跡ならびに上東遺跡の発掘調査報告書である。
2. 各遺跡の調査内容は次のとおりである。

【横内北窯跡群1号】

- ◎所在地 倉敷市玉島陶字大蔵田 ◎調査期間 昭和60年2月25日～3月1日
◎担当者 倉敷市教育委員会文化課学芸員 福本 明・鍵谷守秀

【下庄遺跡】

- ◎所在地 倉敷市下庄69-10 ◎調査期間 平成12年7月4日～7月31日
◎担当者 倉敷埋蔵文化財センター学芸員 小野雅明・中野倫太郎

【上東遺跡】

- ◎所在地 倉敷市上東396-1外 ◎調査期間 平成12年11月7日～12月7日
◎担当者 倉敷埋蔵文化財センター主任 鍵谷守秀 学芸員 藤原好二
(職名はいずれも調査当時)

3. 本書の執筆は、第1章第1節及び第2章を福本、第1章第2節及び第3章を小野、第4章を鍵谷が担当し、全体編集は鍵谷が行った。
4. 発掘調査における遺構の写真撮影は各調査担当者が行い、遺物の写真撮影は福本が行った。
5. 出土遺物の整理にあたっては、倉敷埋蔵文化財センター臨時職員 清水紀子・岸本佳与・森圭子の協力を得た。
6. 下庄遺跡ならびに上東遺跡の発掘調査については、「倉敷埋蔵文化財センター年報8」において既にその概要が公表されているが、本報告書をもって正報告とする。
7. 本書第2図及び第3図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を複製、加筆したものである。
8. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等は、全て倉敷埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

序

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 横内北窯跡群1号.....	1
第2節 下庄遺跡・上東遺跡	3
第2章 横内北窯跡群1号の調査	6
第1節 発掘調査に至る経緯と経過	6
第2節 発掘調査の概要	7
1. 遺構	7
2. 出土遺物	8
第3節 まとめ	25
第3章 下庄遺跡の調査	29
第1節 発掘調査に至る経緯と経過	29
第2節 発掘調査の概要	30
1. 出土遺構	30
2. 出土遺物	36
第3節 まとめにかえて	37
第4章 上東遺跡の調査	38
第1節 発掘調査に至る経緯と経過	38
1. 調査に至る経緯	38
2. 調査の経緯と概要	38
第2節 1区の調査	39
1. 調査区の概要	39
2. 検出された遺構と遺物	41
第3節 2区の調査	49
1. 調査区の概要	49
2. 検出された遺構と遺物	50
第4節 まとめにかえて	53

挿図目次

第1図 遺跡の位置	1	第23図 調査区西端遺構配置図 (S=1/80)	33
第2図 周辺の遺跡1 (S=1/25,000)	2	第24図 土坑6出土土器 (S=1/4)	34
第3図 周辺の遺跡2 (S=1/25,000)	4	第25図 包含層出土土器1 (S=1/4)	35
第4図 調査地位置図 (S=1/1,000)	6	第26図 包含層出土土器2 (S=1/4)	36
第5図 調査区平面図 (S=1/60)	7	第27図 調査区位置図 (S=1/1,000)	38
第6図 調査区土層断面図 (S=1/60)	8	第28図 1区北壁断面図 (S=1/60)	39
第7図 灰原出土遺物1 (S=1/4)	9	第29図 1区東壁北半断面図 (S=1/60)	40
第8図 灰原出土遺物2 (S=1/4)	11	第30図 1区東壁南半断面図 (S=1/60)	40
第9図 灰原出土遺物3 (S=1/4)	12	第31図 1区遺構配置図 (S=1/150)	41
第10図 灰原出土遺物4 (S=1/4)	13	第32図 土坑実測図 (S=1/30)	42
第11図 灰原出土遺物5 (S=1/4)	15	第33図 土坑3出土土器 (S=1/4)	43
第12図 灰原出土遺物6 (S=1/4)	16	第34図 土坑4出土土器 (S=1/4)	44
第13図 灰原出土遺物7 (S=1/4)	17	第35図 土坑4出土石器 (S=1/2)	45
第14図 灰原出土遺物8 (S=1/4)	18	第36図 土坑6出土土器1 (S=1/4)	47
第15図 灰原出土遺物9 (S=1/4)	20	第37図 土坑6出土土器2 (S=1/4)	48
第16図 灰原出土遺物10 (S=1/4)	21	第38図 その他の遺物1 (S=1/4)	49
第17図 灰原出土遺物11 (S=1/4)	22	第39図 その他の遺物2 (S=1/2)	49
第18図 灰原出土遺物12 (S=1/4)	23	第40図 2区北壁・東壁断面図 (S=1/60)	50
第19図 灰原出土遺物13 (S=1/4)	24	第41図 2区遺構配置図 (S=1/150)	50
第20図 調査区位置図 (S=1/1,000)	29	第42図 ピット20出土土器 (S=1/4)	51
第21図 調査区遺構配置図 南壁土層断面図 (S=1/120)	31	第43図 土坑8実測図 (S=1/30)	51
第22図 土坑実測図 (S=1/30)	32	第44図 土坑7・8・溝3出土土器 (S=1/4)	52

図版目次

図版1	1. 調査区遠景(北から) 2. 調査区全景(北から) 3. 調査区全景(南から)	図版4	横内北窓跡群1号出土遺物(2)
図版2	1. 溝状遺構(東から) 2. 落ち込み(東から) 3. 灰原断面(東から)	図版5	横内北窓跡群1号出土遺物(3)
図版3	横内北窓跡群1号出土遺物(1)	図版6	横内北窓跡群1号出土遺物(4)
		図版7	横内北窓跡群1号出土遺物(5)
		図版8	1. 調査区東半部(西から) 2. 調査区西端部(東から) 3. 調査区西端部南壁(南から)

- 図版9 1. 土坑4
2. 土坑5
3. 土坑6
- 図版10 1. 土坑7・8
2. 包含層土器出土状況
3. 作業風景
- 図版11 下庄遺跡出土遺物
- 図版12 1. 1区全景(南から)
2. 1区全景(北西から)
3. 1区北壁
- 図版13 1. 1区東壁北半
2. 1区東壁南半
3. 土坑3
- 図版14 1. 土坑4
2. 土坑6
3. 2区全景(南から)
- 図版15 1. 2区北壁
2. 2区東壁
3. 土坑8
- 図版16 上東遺跡出土遺物(1)
- 図版17 上東遺跡出土遺物(2)
- 図版18 上東遺跡出土遺物(3)

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 横内北窯跡群1号

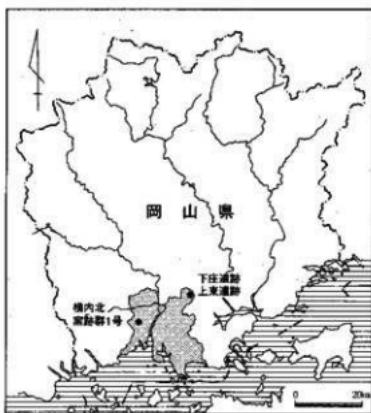
横内北窯跡群1号は倉敷市玉島陶字大蔵田に所在している。

玉島陶地区は、倉敷市の北西端にあたり、JR新倉敷駅の北側から低い丘陵を超えて3kmほど北西の山あいに入った場所にある。周辺は、北側にある弥高山や西側の遙照山などの丘陵によって四方を囲まれておらず、その中に幅500mほどの細長い盆地状の地形が形づくられている。標高50~80mの盆地の中央には、弥高山に源を発する真谷川が山塊の南西裾をまわり込むようにして流れしており、盆地の東端から2kmほど北流して小田川へと合流し、さらに高梁川へとつながっている。こういう地勢からみると、玉島陶地区は小田川流域のひとつとして捉えることができ、古代においては山を越えた南の玉島地域よりも、むしろ真備地域とのつながりが深かったと考えられている。

行政的にみると、玉島陶地区は現在倉敷市に属しているが、古くは下道郡に含まれており、「和名類聚抄」にみえる「下道郡德北郷」の陶村にあたるとされている。陶村は、明治22年に同じ下道郡服部村と合併し、古代の郷名にちなんで穂井田村（明治33年より吉備郡）と称した。しかし、昭和31年になって再び分村し、陶村と服部村の南部が当時の玉島市に入り、服部村の北部は真備町と合併している。その後、玉島市は昭和42年に、また真備町は平成17年とともに倉敷市と合併し、現在に至っている⁽¹⁾。

玉島陶地区周辺の遺跡についてみると、「陶」の名が示すとおり盆地周辺の山際や谷筋沿いの斜面に須恵器や瓦を焼いた多くの窯跡が存在している。これらは備中地方最大の窯跡群として玉島陶窯跡群の名称で広く知られている。しかし一方、周辺ではこうした窯跡以外の古墳や集落遺跡などについては、現在までのところわずかしか確認されておらず、盆地の東にある弥生時代の石塚や石棺が採集されている船岩山遺跡や、古墳時代の遺物散布地の道木遺跡、また盆地北側の丘陵尾根の先端にある陶山城跡という中世山城の存在が知られている程度に過ぎない。そのほか吉備郡穂井田村から出土したとされる須恵質の家形陶棺なども知られているものの、今までのところ明確な古墳の存在は知られていない。いずれにしても陶盆地周辺では窯跡以外の遺跡の存在はきわめて少ないといえるだろう。

さて、玉島陶窯跡群については、分布調査等により現在までに25基ほどの窯跡の存在が確認されている⁽²⁾。このうち発掘調査が行われたものは、盆地西よりの黒土窯跡と東端にあたる寒田窯跡群4号、



第1図 遺跡の位置

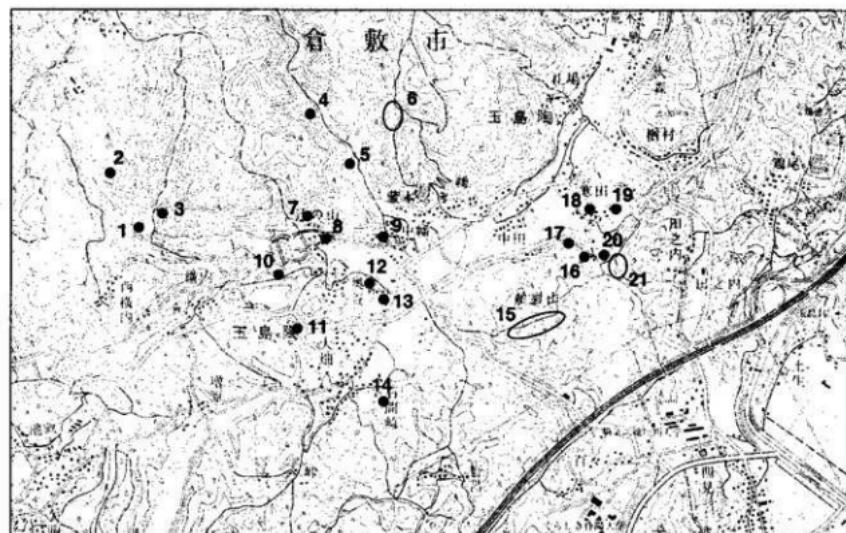
5号などわずかであるが、分布調査等によりおおむね6世紀末頃から奈良時代にかけての時期を中心操業していた窯跡群と考えられている。

発掘調査が行われた窯跡のうち、盆地の東端にある寒田窯跡群4号は、特別養護老人ホームの建設に伴い倉敷市教育委員会により発掘調査が実施されたもので、良好に残された地下式無段無階の窯構造をもつ窯体部が確認されている。窯体や灰原から出土している各種の須恵器や陶棺等から、おおむね6世紀末頃の時期に操業が始まつた窯であるとみられており、玉島陶窯跡群の中でも古い窯跡のひとつであると考えられている¹³⁾。

寒田窯跡群4号の北に隣接する同5号は、広域農道の建設に際して昭和52年に岡山県教育委員会により発掘調査が行われたもので、上方は削平されているものの、地下式無段無階の窯構造をもつ窯体が確認されている¹⁴⁾。出土遺物等から4号窯に継続して操業されていたとみられている窯跡である。

盆地の南西寄りの丘陵中腹にある黒土窯跡は、広域農道の建設に際して昭和54年に岡山県教育委員会により発掘調査が行われたものである。窯跡は窖窓と平窓状を呈する2基の窯体が確認され、出土した須恵器や瓦などから8世紀後半を中心に操業していたとされている¹⁵⁾。

今回報告する横内北窯跡群1号は、細長い盆地の西端にあたる奥谷地区から、さらに谷沿いに西へ



- | | | | |
|---------------|------------|-------------|---------------|
| 1 横内北窯跡群 1～3号 | 7 浄蓮寺窯跡群 | 13 陶神社南窯跡群 | 19 寒田窯跡群 7号 |
| 2 横内北窯跡群 4号 | 8 山の辺窯跡 | 14 石間崎窯跡 | 20 寒田窯跡群 1～3号 |
| 3 横内北鉢鉢跡 | 9 大堂窯跡 | 15 船岩山遺跡 | 21 道木遺跡 |
| 4 真渓谷窯跡群 2号 | 10 奥池南窯跡 | 16 寒田窯跡群 4号 | |
| 5 真渓谷窯跡群 1号 | 11 黒土窯跡群 | 17 寒田窯跡群 5号 | |
| 6 陶山城跡 | 12 陶神社北窯跡群 | 18 寒田窯跡群 6号 | |

第2図 周辺の遺跡1 (S=1/25,000)

向かい、奥池と上池を越えた最奥部に位置している。横内北窯跡群は、遙照山から東に延びる尾根の末端、東向きの斜面に並んで3基の窯跡が存在しているものと考えられており、北端のものを1号窯としている。そして1号窯から南へ10mほど離れた地点と、さらに15mほど行った地点に、須恵器や窯体片が集中してみられる地点があることから、それらを順に2号窯跡、3号窯跡と呼んでいる。採集遺物からいざれも1号窯跡と近い時期に操業されていたと思われる窯跡である。

なお、横内北窯跡群1号については、従前より横内上池西窯跡と呼称していたものであるが、平成4年度以降に実施された遺跡分布調査により、前述のように隣接して2基の新たな窯跡の存在が確認されたため、平成10年度に改訂された倉敷市遺跡分布図の記載に際して、名称を横内北窯跡群1号～3号として呼称することとしたものである。また、ここから北西に谷を300mほど入った南向きの斜面にある横内上池西奥窯跡と呼ばれていたものについても同じく横内北窯跡群4号と呼称している。

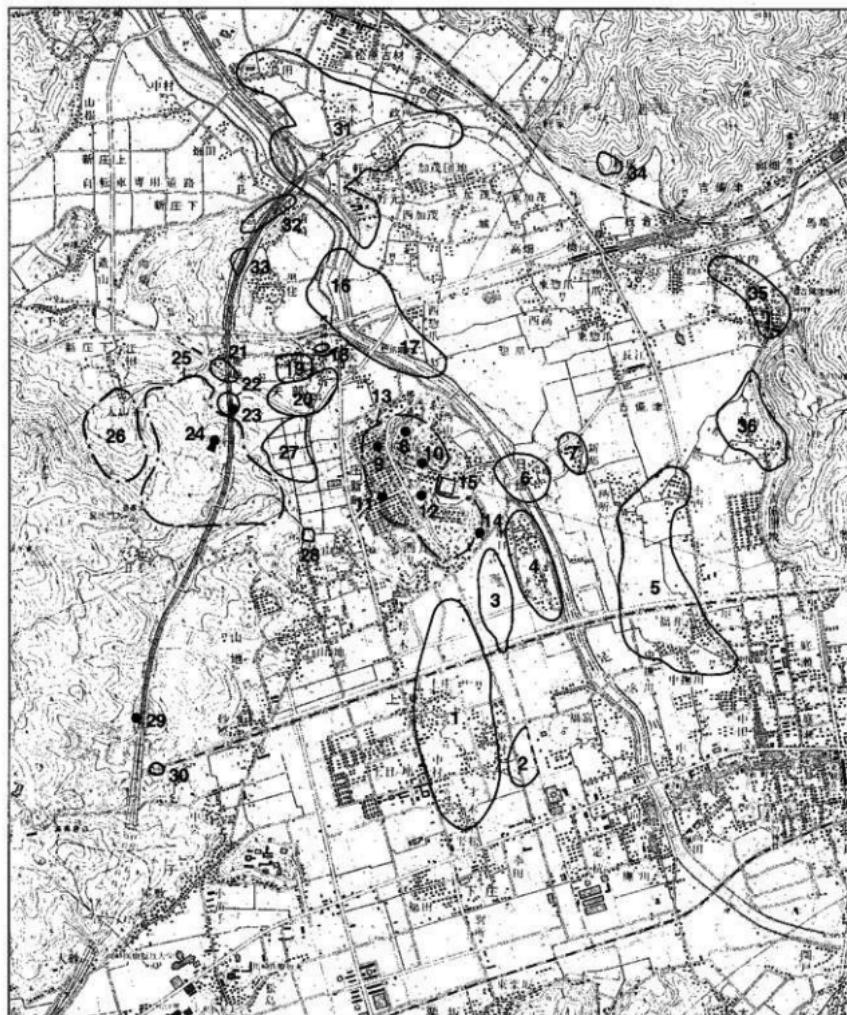
第2節 下庄遺跡・上東遺跡

岡山県中央部の吉備高原を水源とする足守川は、岡山市西端の平野部を南流し、笹ヶ瀬川に合流して児島湖に注ぐ途中、約2kmにわたって倉敷市域を流れる。下庄遺跡・上東遺跡⁽⁴⁾は、その足守川西岸の沖積地に立地する。両遺跡の所在する倉敷市北東部の庄地区は、市内で最も遺跡の密集した地域であり、足守川が形成した沖積平野には、他に岩倉遺跡、才楽遺跡、岡山市川入遺跡など弥生時代以降に発展を遂げた遺跡群が隣接する。近世干拓以前は、これらの遺跡地とその南にある早島丘陵との間に浅海が広がっていた。波穏やかな内海に面した河口域に立地していたことは、下庄遺跡・上東遺跡の地理的・歴史的環境を考えるうえで重要である。

足守川下流域における旧石器時代の遺跡としては、角錐状石器などを出土した矢部堀越遺跡、ナイフ形石器を出土した雲山遺跡、甫崎天神山遺跡などがあげられる。また、東岸の丘陵上にある杉尾西遺跡からも、ナイフ形石器、角錐状石器などが出土しており、当時平原が広がっていたと考えられる瀬戸内海からやや奥まった丘陵上にも後期旧石器の足跡を見ることができる。

縄文時代では、伊能軒遺跡から草創期の有茎尖頭器が出土しており、矢部奥田遺跡や若宮神社東遺跡からは早期の押型文土器が出土している。しかし、これら縄文時代初期には明確な遺構は発見されておらず、定住生活の跡がはっきりと認められるのは、矢部貝塚が形成される中期船元式の時期からである。矢部貝塚は低台地の緩斜面に立地しており、後期前半まで続くとみられるが、ヤマトシジミを主体とする貝層が確認され、魚類はスズキを主体としていた。このことから、当時足守川河口は深い入り江をなし、その北側には河流が注ぎ込む汽水湖沼が広がるような自然環境が復元された⁽⁵⁾。また、中津式土器を出土した西尾貝塚でも同様に汽水域の貝類が主体とされており、縄文海進によって誕生した瀬戸内海の一角、旧児島湾沿岸の様子を知ることができる。

縄文時代晩期では、遺構は確認されていないが矢部寺田遺跡で谷尻式や前池式などの土器や石包丁状削器が出土している。また、竪穴式住居が検出された吉野口遺跡では、打製石斧（石鋤）の出土や土層中からプランタオバールが検出されたことにより水稻耕作を行った可能性が考えられ、沖積地において生業の変化に伴う新たな動きが認められる。晩期後半では、上東遺跡で突堤文土器が出土しており、さらに弥生時代前期以降は岩倉遺跡、川入遺跡など多くの遺跡で土器が散見されるようになる。



- | | | | | | |
|---------|----------|------------|-----------|--------------|------------|
| 1 上東遺跡 | 7 新郷遺跡 | 13 王墓山古墳群 | 19 矢部遺跡 | 25 矢部古墳群 | 31 津寺遺跡 |
| 2 下庄遺跡 | 8 橋梁遺跡 | 14 西尾貝塚 | 20 矢部寺田遺跡 | 26 矢部大山谷古墳群 | 32 甫崎天神山遺跡 |
| 3 岩倉遺跡 | 9 西の平古墳 | 15 日畠寺 | 21 矢部堀越遺跡 | 27 伊能軒遺跡 | 33 雲山遺跡 |
| 4 才樂遺跡 | 10 法伝山古墳 | 16 足守川加茂遺跡 | 22 矢部奥田遺跡 | 28 若宮神社東遺跡 | 34 杉山西遺跡 |
| 5 川入遺跡 | 11 男房岩遺跡 | 17 矢部南向遺跡 | 23 矢部貝塚 | 29 二子14号墳 | 35 吉野口遺跡 |
| 6 藤ノ木遺跡 | 12 王墓山古墳 | 18 麻喰神社遺跡 | 24 矢部大塙古墳 | 30 二子御堂奥古窯跡群 | 36 東山遺跡 |

第3図 周辺の遺跡2 (S=1/25,000)

また、今回報告する上東遺跡の調査区では、中期中頃の遺構も検出されている。

弥生時代中期末には、平野部周辺の丘陵上に小規模な集落が形成される。沖積地において集落遺跡群が顕在化するのがこの頃からである。上東遺跡では、後期前葉に築かれた波止場状遺構が検出され、吉備中枢の表玄関としての性格が注目された。この流域に貨泉がもたらされ、銅鐸（高塚遺跡）⁽⁸⁾・小銅鐸（矢部南向遺跡）・小形銅鏡（足守川加茂遺跡）⁽⁹⁾などが出土する背景として、先進地域と結ばれた海上交通の存在がうかがえる。後期後葉には、独立低丘陵上に楯築遺跡、鯉喰神社遺跡、女男岩遺跡などの弥生墳丘墓が築かれた。楯築遺跡では、発掘調査により特殊器台と特殊壺などを用いた祭祀の実態が解明され、足守川流域にとどまらない広い範囲に勢力を拡大した首長の存在が認識された⁽¹⁰⁾。

古墳時代前期には、丘陵上に矢部大塙古墳が築造され、沖積地では引き続き多くの遺構、遺物が確認されている。このころ、上東遺跡の波止場状遺構は、土砂堆積が進んだため当初の運河としての機能が失われていったと考えられている。前期終わりから中期には、足守川流域では遺跡が衰退する現象が認められ、弥生時代から続いている集落が再編された可能性が指摘されている。この時期の中頃古墳としては、王墓山丘陵に築かれた法伝山古墳、西の平古墳などがある⁽¹¹⁾。古墳時代後期には、日差山山頂の北東の丘陵地帯や王墓山丘陵などで群集墳が築かれた。終末期の7世紀には日差山の南側で二子14号墳が築造され、中央政権と結びついた被葬者像が注目された。

7世紀後半には王墓山丘陵東麓の日畠廃寺に伽藍が築かれ、二子御堂奥古窯跡群で焼かれた瓦が使用された。8世紀には、山陽道の駅家「津観駅」である可能性が指摘される矢部遺跡が営まれた。

沖積地の遺跡群は、古墳時代後期から古代・中世にかけては、おおむね安定して生活が営まれたと考えられる。地下浅い部分に残された遺構は耕作等により失われている場合も少なくないと思われるが、川入遺跡では古代の公的な性格をもつ港湾施設と考えられる遺構が検出され、備中國中枢部との関連が重要視された。また、上東遺跡でも中世の住居跡や井戸などの生活遺構が調査されている。

註

- (1) 倉敷市文化連盟『倉敷市歴史年表』1978
- (2) 倉敷市教育委員会『倉敷市遺跡地図(玉島地区)』1999
- (3) 藤原好二ほか『寒田窯跡群4号』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第10集 倉敷市埋蔵文化財センター 2003
- (4) 柳瀬昭彦・伊藤見『黒土窯址・寒田窯址』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告31 岡山県教育委員会 1979
- (5) 註(4)と同じ
- (6) 岡山県教育委員会『山陽新幹線建設に伴う調査II』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 1974
岡山県教育委員会『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 1977
- 岡山県教育委員会『下庄遺跡・上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告157 2001
- 岡山県教育委員会『上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告158 2001
- (7) 岡山県教育委員会『山陽自動車道建設に伴う発掘調査6』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告82 1993
- (8) 岡山県教育委員会『山陽自動車道建設に伴う発掘調査18』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告150 2000
- (9) 岡山県教育委員会『足守川河川改修工事に伴う発掘調査』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94 1995
- (10) 近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 1992
- (11) 倉敷考古館『倉敷考古館研究集報10』1974

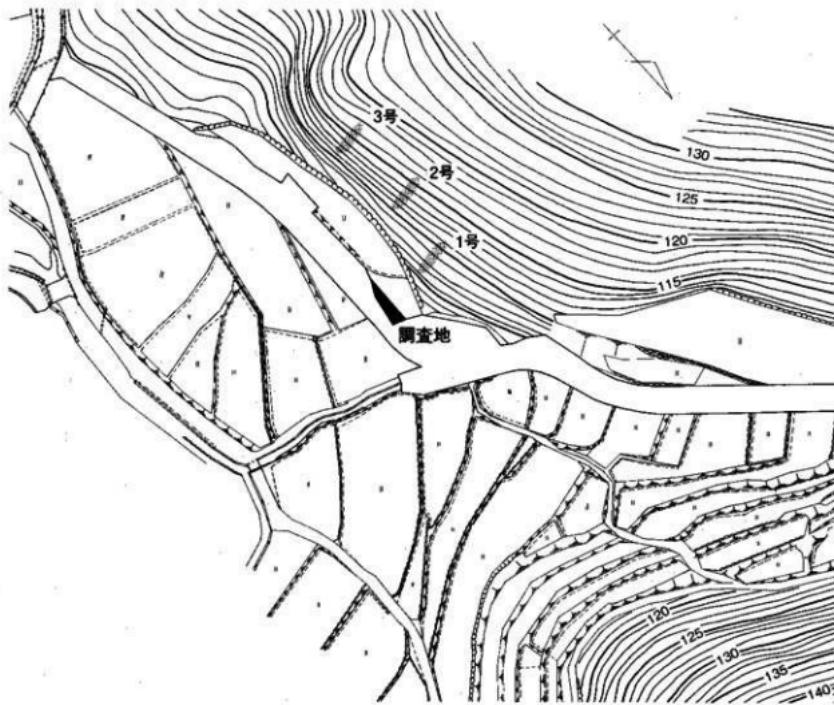
第2章 横内北窯跡群1号の調査

第1節 発掘調査に至る経緯と経過

横内北窯跡群1号の発掘調査は、大蔵田線農道の建設工事に伴い実施されたものである。

玉島陶字大蔵田地区は、陶盆地の中でも西端の谷奥にあたり、谷沿いの低地には山がかりの湧水を利用した棚田が形成され、周囲の丘陵斜面には果樹園、畑地等が開かれている。当該農道は、同地内において、谷周りの棚田耕作等の利便を図るために計画されたもので、山裾を巡っている畦道を改良して、幅4mの農作業用道路とする事業である。

このうち、昭和59年度工事分において、その一部が周知の遺跡である横内北窯跡群1号の遺跡の範囲に含まれていることが判明したため、文化財保護法の規定により昭和60年2月18日付けで倉敷市長より埋蔵文化財発掘の通知が提出された。工事計画によると、横内北窯跡群1号の灰原の末端部が道路法面工事によって削平されるというものであった。これを受け、事業担当課である倉敷市玉島支



第4図 調査地位置図 (S=1/1,000)

所産業課と保存協議を行った結果、やむを得ず工事により削平される灰原の一部、約15mについて、倉敷市教育委員会により発掘調査を実施することとした。

調査対象区は、山際から少し離れた小さな水田の端の部分にあたる。当該窯跡の窯体部分は西方の斜面に残存していると思われ、その下方にある灰原についても畑地や水田の造成により多少の削平を受けているものの比較的良好に残存しているのではないかと推測された。こうした中、発掘調査は昭和60年2月25日から3月1日にかけて実施された。

調査では、重機により表土除去を行ったのち、順次灰原層を掘り下げ、地表下約0.7~1.2mで黄灰色土の基盤層に達した。基盤層は東に向かって緩やかに傾斜しており、その上面から炭灰層が堆積した溝状の遺構や落ち込みなどが検出された。また、調査面積はきわめて小規模のものであったが、灰原中からは窯体片などとともに、須恵器片及び瓦片等が多量に出土し、その量は遺物収納コンテナ約70箱分に達した。

なお、今回の道路改修工事においては、1号窯跡に伴う灰原のみが検出されており、南側に並んで存在していると思われる2号及び3号窯跡については、工事区内では灰原等の存在は確認されていない。

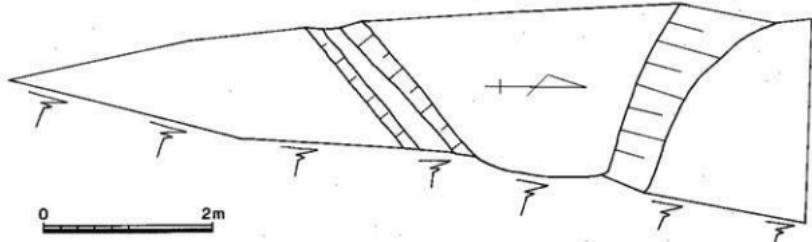
第2節 発掘調査の概要

1. 遺構

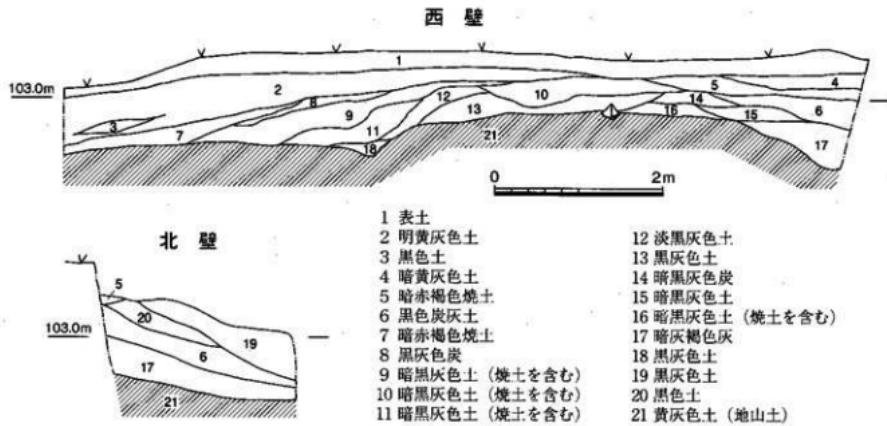
調査地は、南北95m、東西2.5mの細長い三角形を呈する狭小な区域であり、また灰原の末端部ということもあって、灰原のほか遺構としては、わずかに溝状の遺構と落ち込みがみられた程度である。

灰原は、調査区のはば全面にわたって検出されており、基盤層である角礫を含む黄灰色土の上に堆積している。基盤層は、第6図の断面図に見られるように、調査区の北寄りで50cmほどの高まりとなってしまっており、灰原はその左右に振り分けられるように堆積している。灰原の厚さは、高まりの上で約40cm、北側の落ち込み付近では約1mの厚さがあった。灰原層中からは、窯体片や須恵器片、瓦片等が大量に出土している。

溝状の遺構は、高まりの南側に沿って検出されている。溝状遺構の幅は約60cm、深さ15cmほどで、北東方向に向かって傾斜している。溝の中の堆積土は周辺の灰原層と同じ黒灰色土で、須恵器片等も含まれている。



第5図 調査区平面図 (S=1/60)



第6図 調査区土層断面図 (S=1/60)

また、基盤層の高まりの北側には、急な落ち込みがみられた。落ち込みの深さは約70cmで、西に向かって湾曲している。この落ち込みの堆積土は、炭を多く含む暗灰褐色の灰原の土であり、須恵器片や瓦片を多く含んでいる。

2. 出土遺物

遺物はすべて灰原から出土したもので、各種の須恵器片が遺物整理箱約50箱分、瓦片が約20箱分のあわせて70箱分ほどが出土している。灰原からは、須恵器と瓦が入り混じって出土しており、この窯では須恵器と瓦の両方を焼いていたものと思われる。須恵器の器形の種類には、蓋壺・壺・皿・高壺・鉢・壺・瓶・平瓶・甕・瓶等があり、瓦では丸瓦と平瓦がほとんどで、軒先瓦は検出されていない。

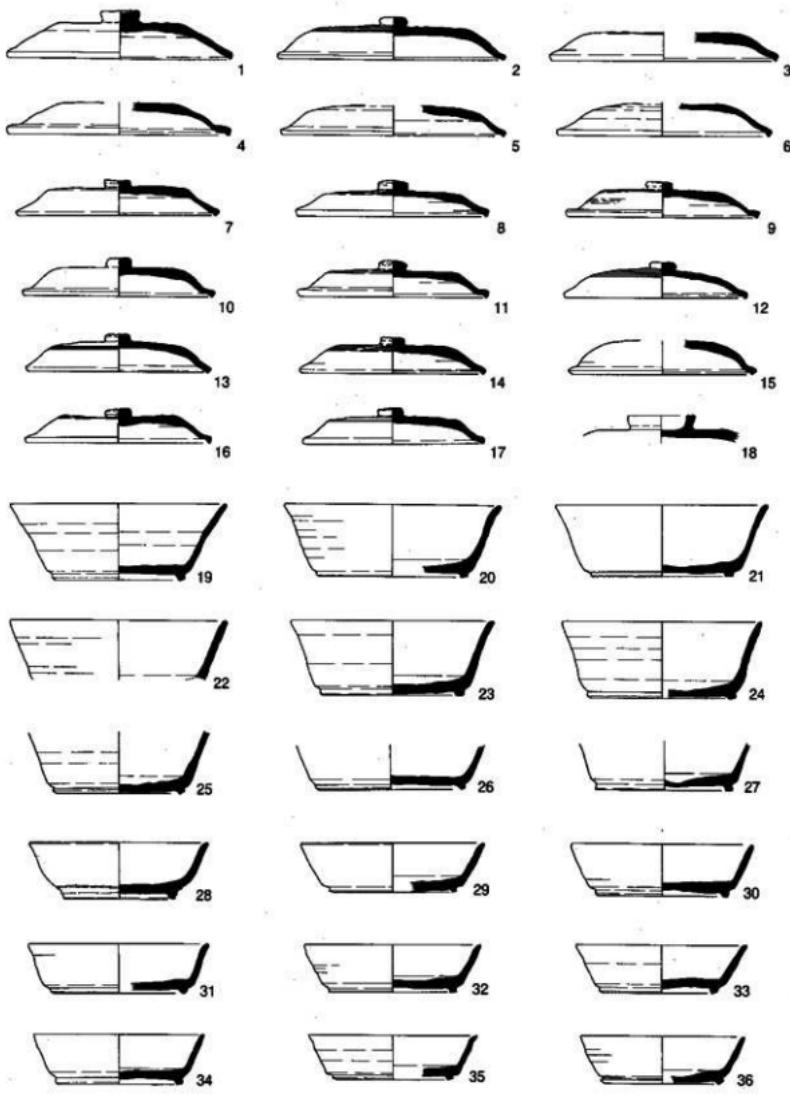
(1) 須恵器 (第7~15図、図版3~5)

壺蓋 (1~18)

壺Bに伴う蓋で、天井部中央に貼付された碁石状のつまみが付いており、中央部が浅く窪んでいるもの(1~7)もある。平らな天井部から屈曲して稜線をもち、口縁端部は屈曲させて短く下方に突出させるものが多くみられる。また天井部から口縁部にかけて、緩やかに内彎して張り出し、わずかに丸みをもっているもの(12~15)もみられる。天井部の外面は、ヘラケズリのままのものや削った後にヨコナデをしているものがあり、またカキ目を施しているものも多くみられる。口径の大きさによって18cmのもの(1~6)と14.5~16cmのもの(7~17)に分けることができる。18は径5.2cm、高さ1.1cmの環状のつまみを持っている壺蓋と思われる破片であるが、高台付の皿の可能性もある。

壺B (19~36)

高台をもつ壺身である。口径が15.8~17.2cmで、器高が5.7~6.1cmのもの(19~27)と、それをやや小形にした口径13.0~14.3cm、器高3.6~4.6cmのもの(28~36)とに分けられる。19~27は、底部から屈曲して、わずかに外反気味に斜め上方に張り出す体部をもち、口縁端部は丸くおさめている。



第7図 灰原出土遺物 1 (S=1/4)

0 10cm

高台は貼付高台で、断面は角張って、短く外側に張り出している。高台の端面には、水平のものと外傾しているものがあり、凹面をなしているものもある。口縁部から体部にかけては、内外面ともにヨコナデを施している。また底部外面は、回転ヘラケズリのち指頭によるナデが加えられ、底部内面も指頭によるナデが施されているものがほとんどである。小形の壺(28~36)は、底部からほぼ直線的に短く立ち上がるものが多く、中に緩やかに内彎して立ち上がり、端部をわずかに外反させるもの(28)もみられる。いずれも口縁端部は丸くおさめている。高台の形態や調整の方法は、ほぼ同じである。

壺A(37~60)

無台の壺身である。平らな底部から体部にかけて緩やかに内彎して立ち上がるものと、斜め上方に直線的に延びるものがある。中に丸みをもった底部から内彎して口縁部にいたるもの(57)も含まれている。口縁端部はやや肥厚ぎみに丸くおさめているものが多くみられる。体部から口縁部にかけては内外面ともヨコナデを施しており、底部内面には不定方向のナデを加えているものが多い。底部外面は、ロクロからヘラで切り離した痕跡を残したままのものが多く、調整を加えるとしても粗くナデを施す程度である。口径は12.5~14.8cm、器高は3.2~4.1cmまでのものがあり、57~60は口径が12cm台のやや小形のものである。

台付皿(61~66)

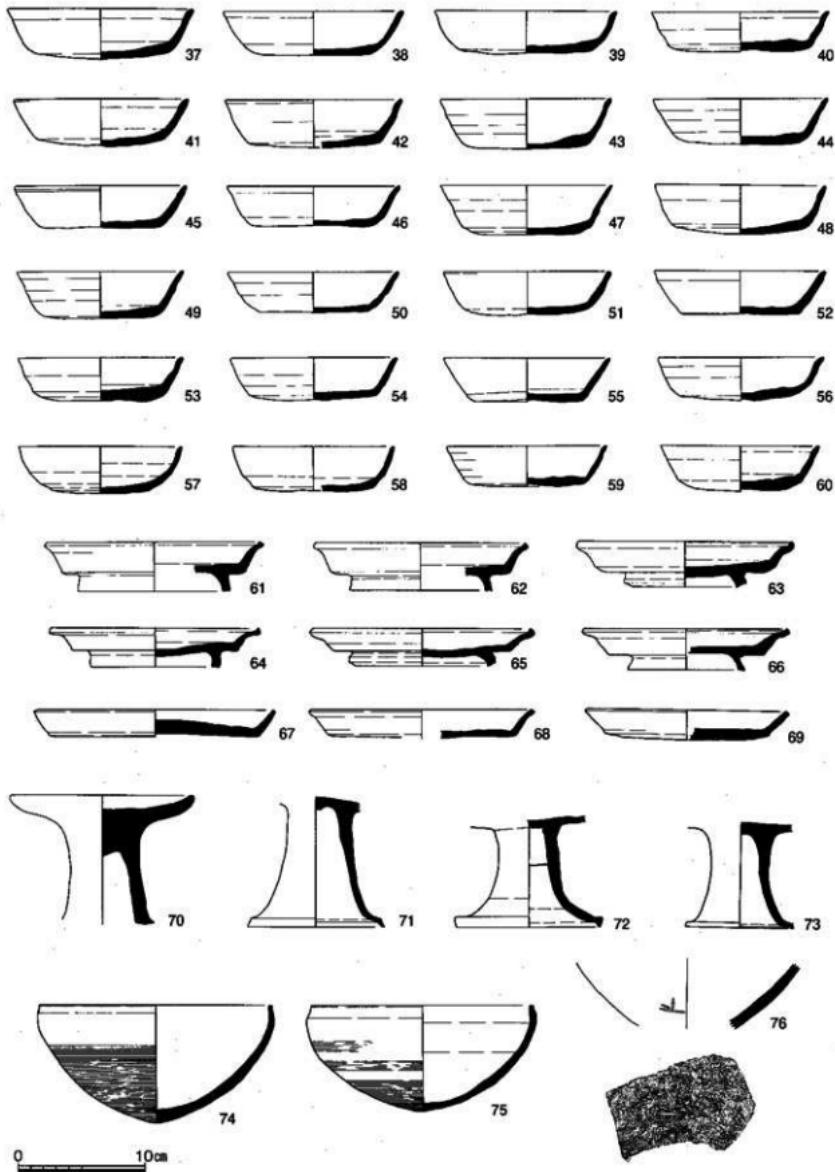
口縁部から底部にかけて壺B蓋とよく似た形態をもっており、環状のつまみをもつ壺蓋との区別は明瞭でないが、ここでは高台を有する皿として示した。扁平につくられた底部から明瞭な稜線をもって短く屈曲して口縁部に至り、端部は短く上方へ突出させている。口径は16.4~17.8cmのもののがみられる。高さ1.1~1.3cmの高台は、屈曲する底部と口縁部の境から内側に入って貼り付けられており、断面は角張って、外側に張り出しているものが多いが、ほぼまっすぐにおけるもの(64)もみられる。高台端部は接地面に水平なものと外傾しているものがあり、端面は凹面をなしている。口縁部から体部にかけては全体にヨコナデを施しており、底部内面は指頭によるナデで仕上げているものもある。底部外面は、ロクロからヘラで切り離した痕跡を残したままのものとヨコナデを施したものがある。

皿(67~69)

無台の皿である。平らな底部から明瞭な稜線をもって屈曲し、斜め上方に短く立ち上がり口縁端部は面をなしている。底部の厚みが口縁部に比べかなり厚くつくられているもの(67)もある。口縁部は内外面ともヨコナデを施し、底部内面は指頭によるナデ仕上げ、底部外面はヘラで切り離したあとを指頭によりナデで調整している。口径は16.2~19.0cm、器高2.2~2.4cmのもののがみられる。

高壺(70~73)

70は壺部から脚部上部にかけての破片で、浅く丸みを帯びた皿状の壺部に器壁の分厚い筒状の脚部が取り付いており、壺部との接合部は特に厚くつくられている。焼成はあまく、軟質で、全体に指頭によるナデを施しているが、やや粗いつくりのものである。71~73は脚部の破片である。壺部との接合部から緩やかに外反しながら広がり、斜め下方に張り出した脚端部は短く屈曲して外面に面を有している。脚部の内外面は、全体にヨコナデが施されている。透かしの入ったものはみられず、いずれも焼成はやや軟質である。



第8図 灰原出土遺物2 (S=1/4)

鉢 A (74~76)

鉄鉢とよばれる器種で、ほぼ完形に復元できたものが2点ある。丸みを帯びた尖底から緩やかに内彎しながら立ち上がるもので、口縁部は器壁を薄くしてわずかに屈曲させ、端部には面を有している。体部から底部にかけての外面にはカキ目が施されており、口縁部外面から体部内面にかけてはヨコナデ、底部内面は指頭によるナデ調整で仕上げられている。76は鉄鉢の体部下方の破片と思われるもので、カキ目が施されたのちに、ヘラ状の工具で描かれた「下」という文字にみえる線刻が認められる。

壺蓋 (77~80)

天井部からほぼ直角に屈曲して、下方に延びる口縁部をもつもの(77~79)と、平らな天井部から直角に短く屈曲した口縁をもつ小形のもの(80)とがみられた。77は口縁部が欠落しているが、窪ん

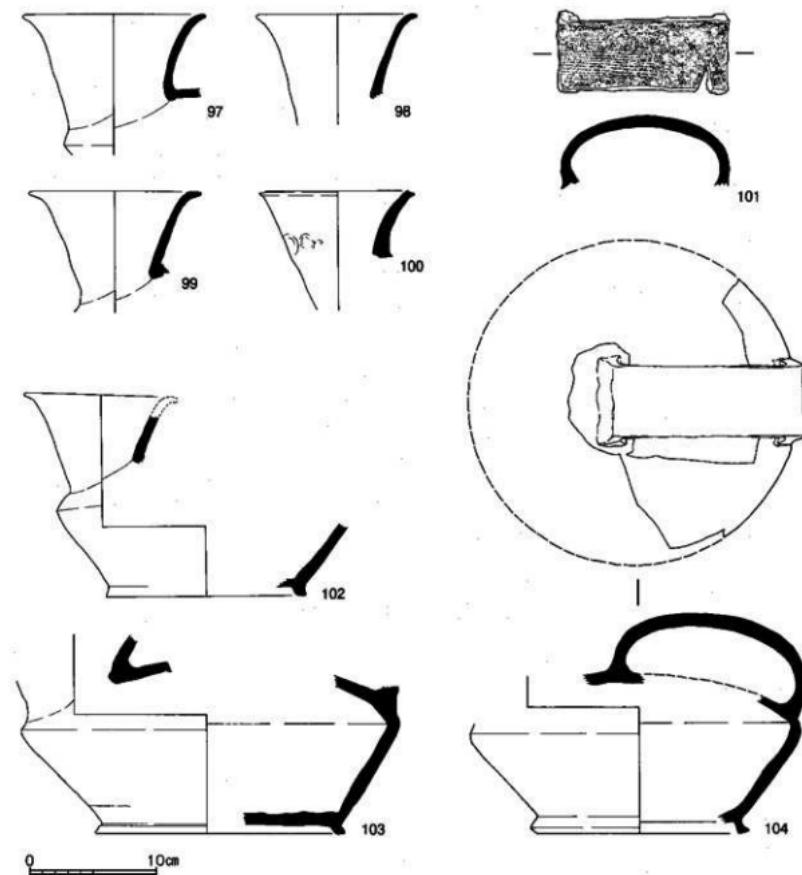


第9図 灰原出土遺物3 (S=1/4)

だ天井部の中央に大きめの宝珠を付けており、天井部全体に自然釉がかかっている。天井部外面はヨコナデ、内面は指頭によるナデが施されている。78にはつまみの剥落した痕跡がみられ、77と同様な宝珠をもつものと思われる。口縁部はまっすぐにのびて端部は丸くおさめており、天井部外面にカキ目、内面はナデを施している。79は小片であるが、やや外反気味に延びる口縁部を有している。80は小形のもので、天井部に宝珠のつまみを付けている。天井部外面から口縁部にかけてはヨコナデ、天井部内面は指頭によるナデで仕上げている。天井部の端に、ヘラ先による「×」印状の小さな線刻が残されている。

壺(81~96)

81~85は壺の口縁部の破片である。緩やかに外反しながら斜め上方に立ち上がるもので、端部は



第10図 灰原出土遺物4 (S=1/4)

外傾気味に拡張させて面をなしている。基部から長く大きく広がっているもの(81)ものもみられる。86～89は体部から底部にかけての破片で、いずれも底部の外周に沿って貼り付けられた高台を有している。86は、やや肩の張った球形の体部をもつ小形のもので、外面にはカキ目が施されている。87・88も体部外面にカキ目が施されている。89は、大きく外方に張り出した高台をもつものである。

90～96は、小形の瓶形の壺である。90・91は二段に屈曲する口縁部をもち、端部は上方へ拡張して面を有している。92は口縁部の小片で、端部を外反させ、丸くおさめている。93・94は細長い頸部に短く屈曲する口縁部をもつもので、水瓶と思われる。95・96は体部から底部にかけての破片で、緩やかな下彫れの体部に大きめの底部をもっている。96は体部下端にタタキ目のちヨコナデを施しており、底部には下駄印と思われるクロロ台の痕跡が残されている。また91・93・95の肩部には分割成形に伴う円盤閉塞の痕跡が認められる。

平瓶(97～104)

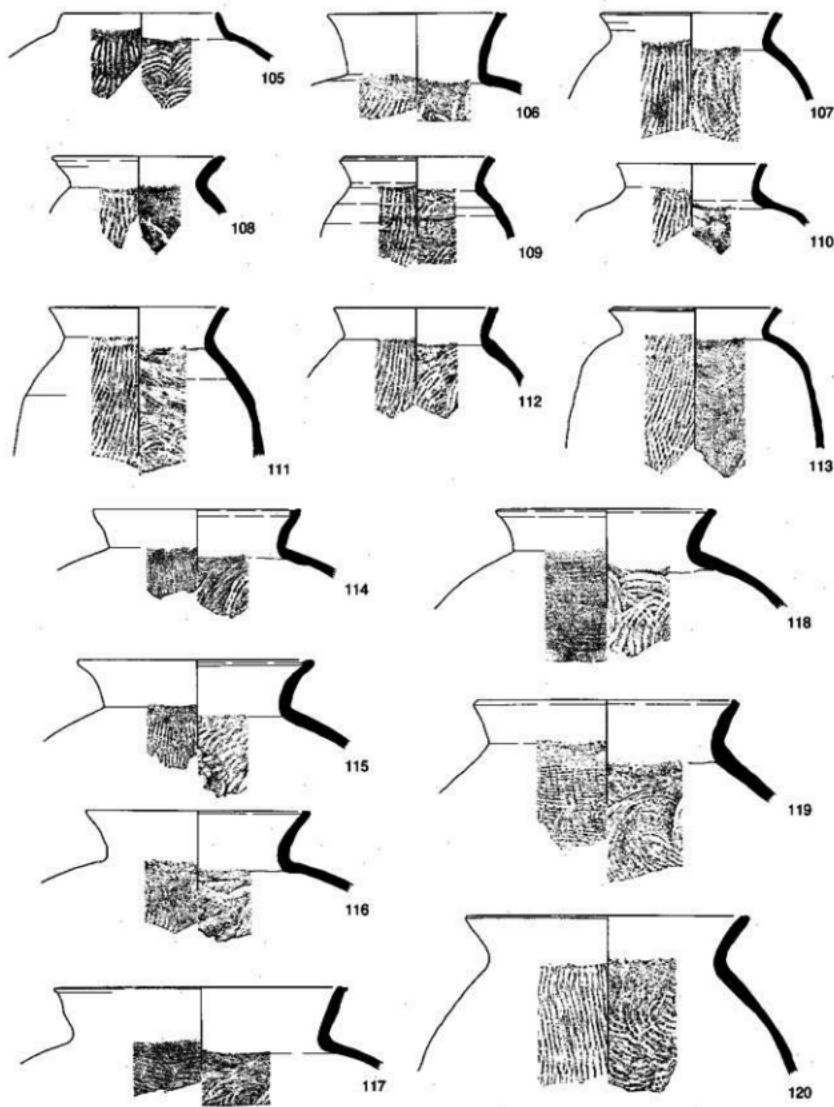
提梁と高台を有する平瓶である。いずれも部分的な破片であるが、全体の形状はおおむね推測することができる。斜め下方に踏ん張った高台は、底部の外周に貼り付けられている。体部は、平坦な底部から直線的に斜め上方に立ち上がり、丸みをもつ天井部と体部側面との間には稜線をもっている。天井部に貼り付けられた提梁は、幅5～6cmの幅広の板状で、大きく湾曲させて、後端は体部の稜線近くまで達している。中に101のように提梁の上面にカキ目が施されているものもある。注口部は、緩やかに外反し、端部は外側に拡張して丸くおさめているものが多いが、端面を窪ませて段を有しているもの(100)もみられる。天井部の中央部分にはやや大きめの円盤閉塞の痕跡が確認できる。また、体部から注口部にかけては丁寧なヨコナデを施しているが、かすかに体部外面にタタキ目、内面には同心円文の痕跡が残されているものもみられる。

壺(105～146)

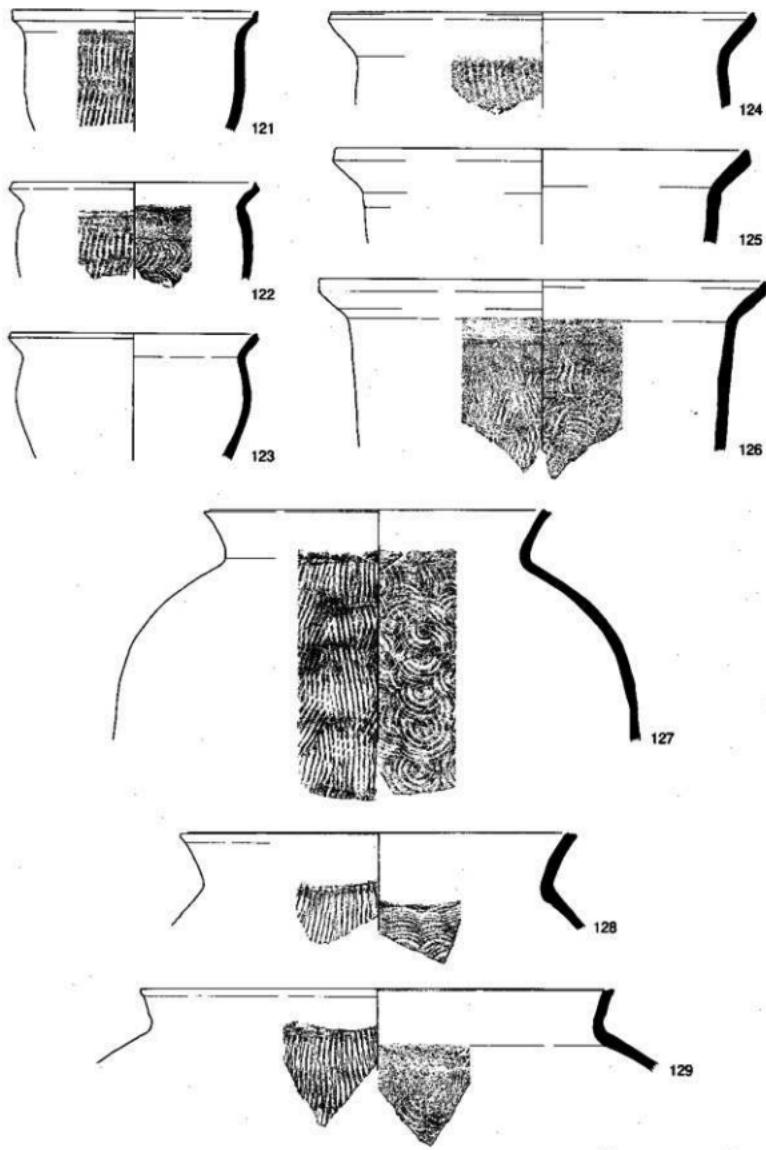
壺の破片は大量に出土しており、大きさ、形とも様々なものがあるが、全体の姿がわかるように復元できたものはない。壺の口縁部の形状についてみると、105のように口縁部が短く内傾するものや、106のように外反気味に長く立ち上がるものなどがあるが、小形から中形の壺の多くは、「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、端部をわずかに拡張して面をもつもので、口縁端面を浅く窪ませているものも多くみられる。胴部から肩部にかけての外面には平行タタキ、内面には当板の同心円文が残されている。

121～126は土師器の長胴の壺に似た形状を呈するもので、小形のもの(121～123)と大形のもの(124～126)がある。ほとんど広がらない筒状の胴部から斜め上方に屈曲して延びる口縁部をもち、端部は上方へ拡張して外側に面をつくっている。胴部外面は平行タタキ、内面は同心円文で、のちに内外面ともヨコナデを施している。特に123や125はタタキ目を消すように丁寧に仕上げている。いずれも焼成は軟質で、灰白色～黄灰色の色調を呈している。

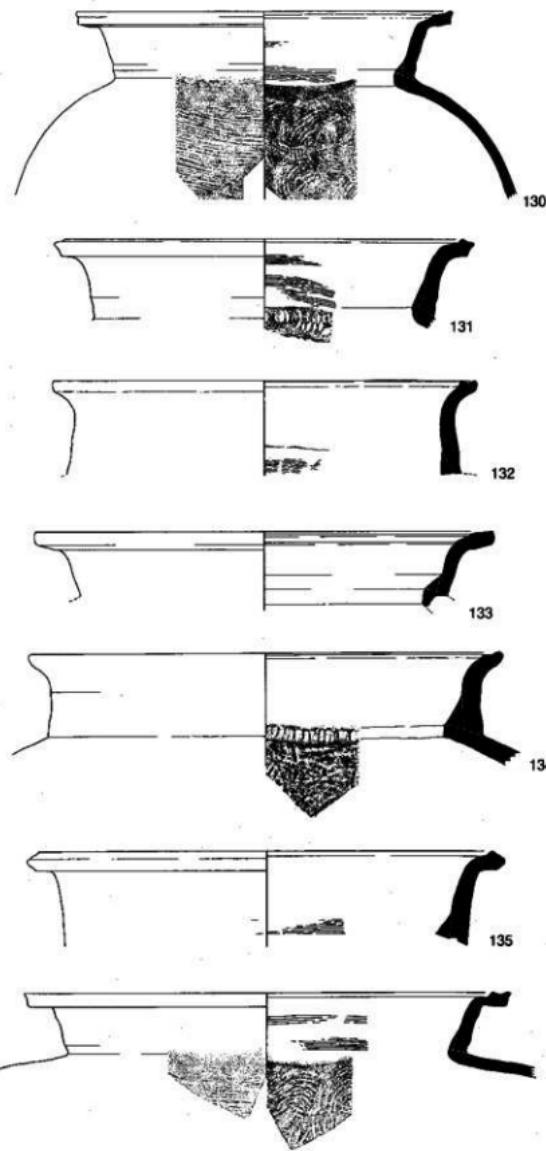
130～139は大形の壺の口縁部である。小片のために復元径が不確かなものもあるが、口径は30.3～66.0cmを測る。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部近くで短く屈曲させて外側に広げている。口縁端部は肥厚して段をなしており、ヨコナデにより中央が浅く窪んだ面を有するものが多い。これらの人形の壺は、いずれも小中形のものとは異なったの成形技法を用いている。すなわち、タタキ目を



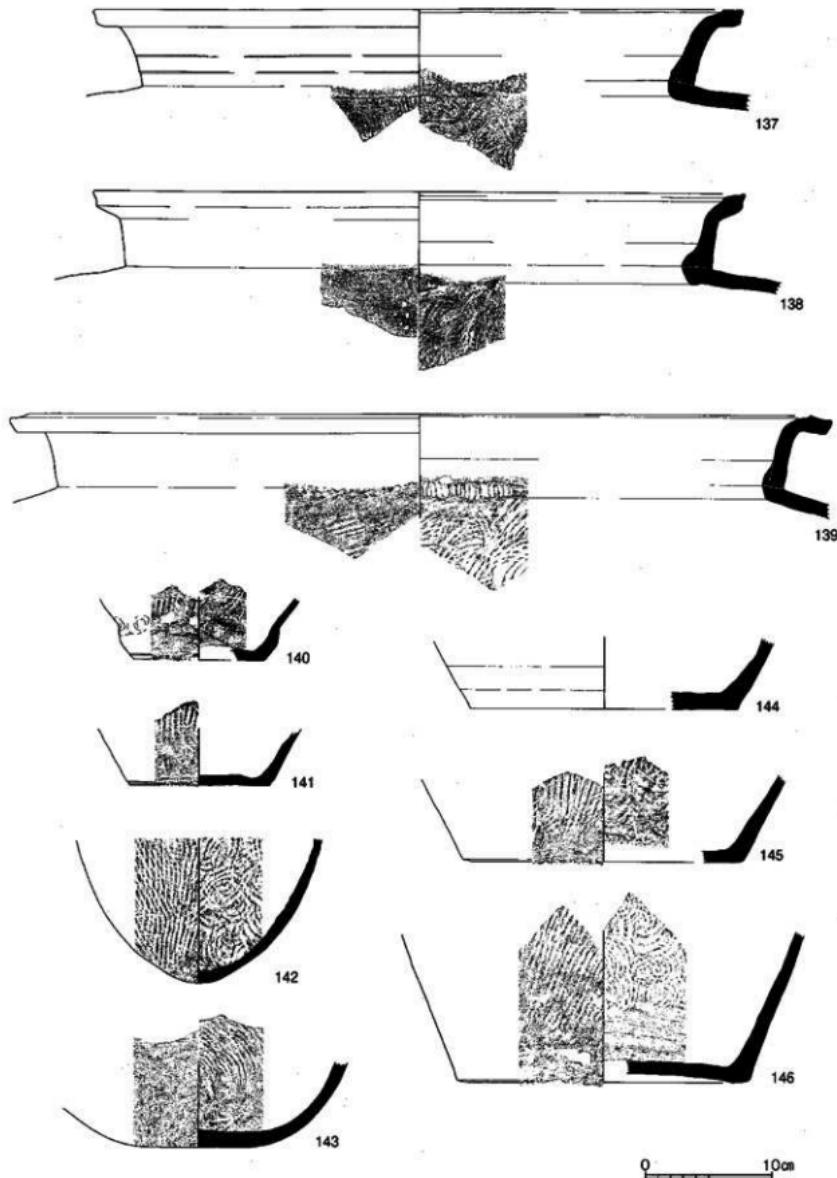
第11図 灰原出土遺物5 (S=1/4)



第12図 灰原出土遺物6 (S=1/4)



第13図 灰原出土遺物7 (S=1/4)



第14図 灰原出土遺物8 (S=1/4)

施し成形した胴部の端に、別作りの口頭部を上乗せにして接合しているものである。口縁部の断面をみると、胴部上端は別作りの口頭部の径よりやや内側で切り落とし、口頭部を直接胴部にのせたあと、内側の胴部上端の出っ張り部分に粘土帯を貼り付けて補強するという手法で接合されている。このため口頭部の下端面にタタキ目が転写されているもの（134）も確認できる。また接合部の粘土帯を貼り付けた部分は内側に肥厚しており、そこにタタキ目を施しているもの（131・134・137・139）や粗いハケ目調整を施しているもの（130・132・135・136）もみられる。なお、口頭部の外面はヨコナデのみで、施文はみられない。

140～146は壺の底部の破片である。中小形のものには、半底のもの（140・141）と尖底のもの（142）、丸みをもった平底風のもの（143）がみられる。外面は平行タタキ目、内面には同心円文が施されるが、141の内面はヨコナデ、143の外面は丁寧なカキ目で仕上げられている。大形のもの（144～146）は平底で、外面に平行タタキ目、内面に同心円文が残されているものと、内外面とも丁寧なヨコナデによりタタキ痕が消されているもの（144）がみられる。

骨蔵器（147～153）

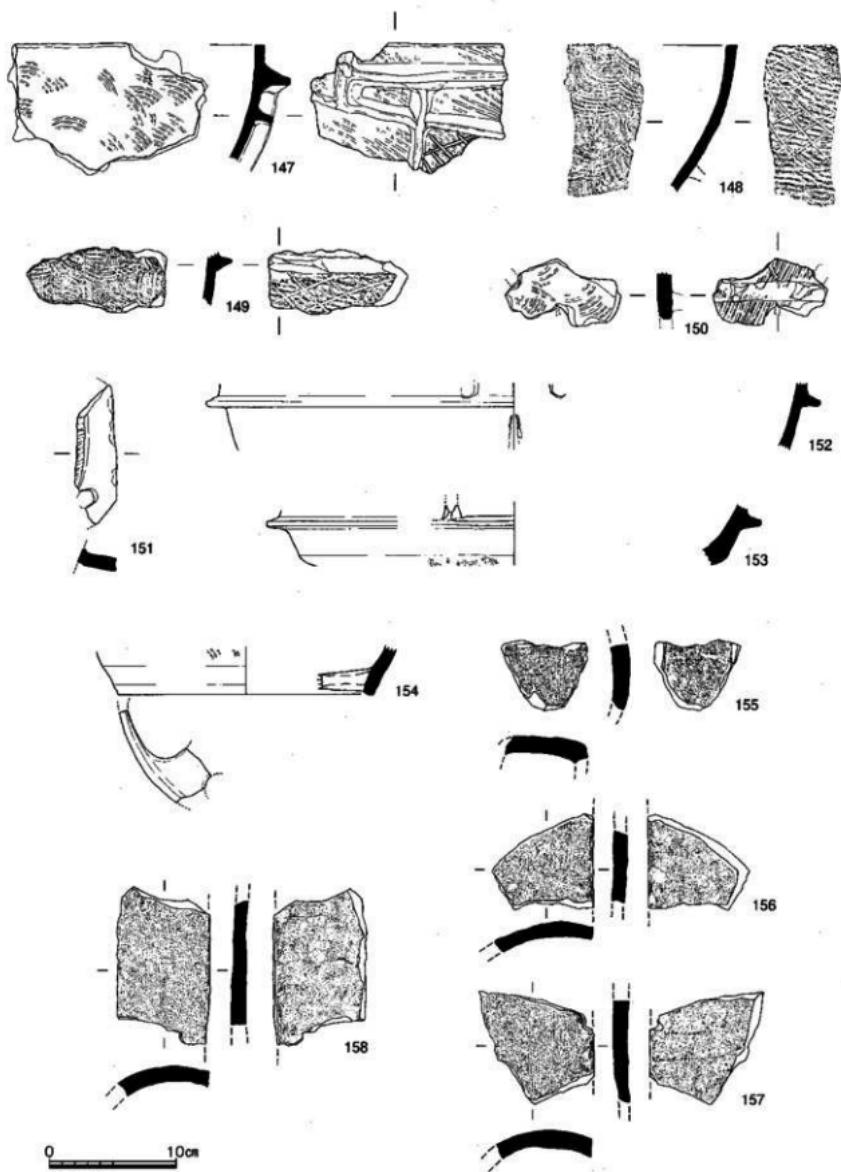
147～153は同一固体ないしは同一の器種と思われる破片である。いずれも焼成があまく、暗黄灰色を呈している。小片ばかりであるため器種ははっきりしないが、装飾的な要素が高いことなどから、ここでは骨蔵器として取り上げた。口縁部と思われる2点の破片（147・148）は、緩やかに内摺して立ち上がり、端面には面をもっている。147は口縁部端の1cmほど下方から体部にかけて、高さ1.5～2.0cmのタガ状の突帯が交差するように複雑にめぐっている。外面には平行タタキ目、内面には同心円文が残されており、体部の突帯で区切られた中の一部にはヘラ先による格子目文が描かれている。148は口縁部端外から格子目文が描かれており、体部の下方には突帯の剥がれた痕跡が残っている。149～151は突帯部分を含む小片であるが、150には透かし状の切れ込みの痕跡がみられる。また151の突帯は把手状に角度をつけて切られ、1.2cmほどの円孔があけられている。152・153は底部付近の破片と思われ、タガ部分での直径は49.7cmと39.4cmに復元できた。双方ともタガの上部に接して、透かし状の切れ込みの痕跡が残されている。153は内外面ともナデにより仕上げられており、外面下端付近は粗いハケ目が施されている。

瓶（154）

瓶の底部の小片が1点のみ確認されている。底部はわずかに内側に張り出しており、縁に沿って楕円形の孔が穿たれている。体部外面は平行タタキののちヨコナデが施され、孔の穿たれた底部は内外面とも不定方向のナデで仕上げている。

その他の須恵器（155～158）

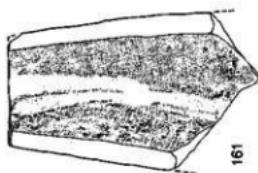
器種不明の須恵器であるが、胎土や焼成、調整などから同一固体と思われる。いずれも外面に縱方向のカキ目が施され、内面は粗いナデで仕上げられている。155は両端が直角方向に折れ曲がるようみられる。その他（156～158）は円筒状に丸みをもつものであるが、いずれにもヘラで削られたまっすぐな端面をもっている。これが方形の透かし状を呈する部分となるか、あるいは端部として終っているものであるのかについては、小片であるためはつきりしない。胎土はやや粗いものであるが、焼成は良好で部分的に自然釉がかかっている。



第15図 灰原出土遺物9 (S=1/4)

第16圖 灰原出土遺物10 (S=1/4)

10cm



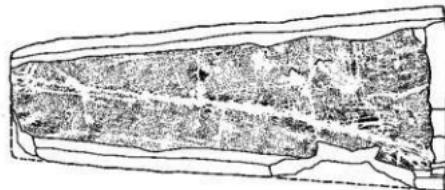
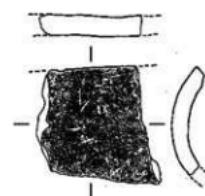
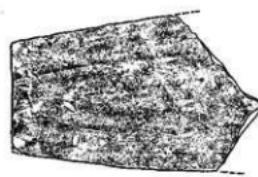
161



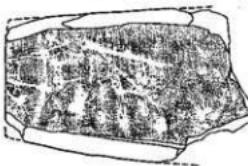
162



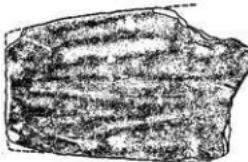
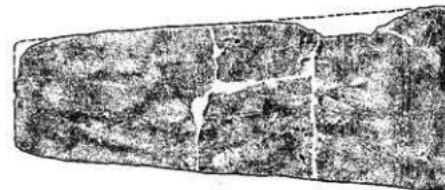
163



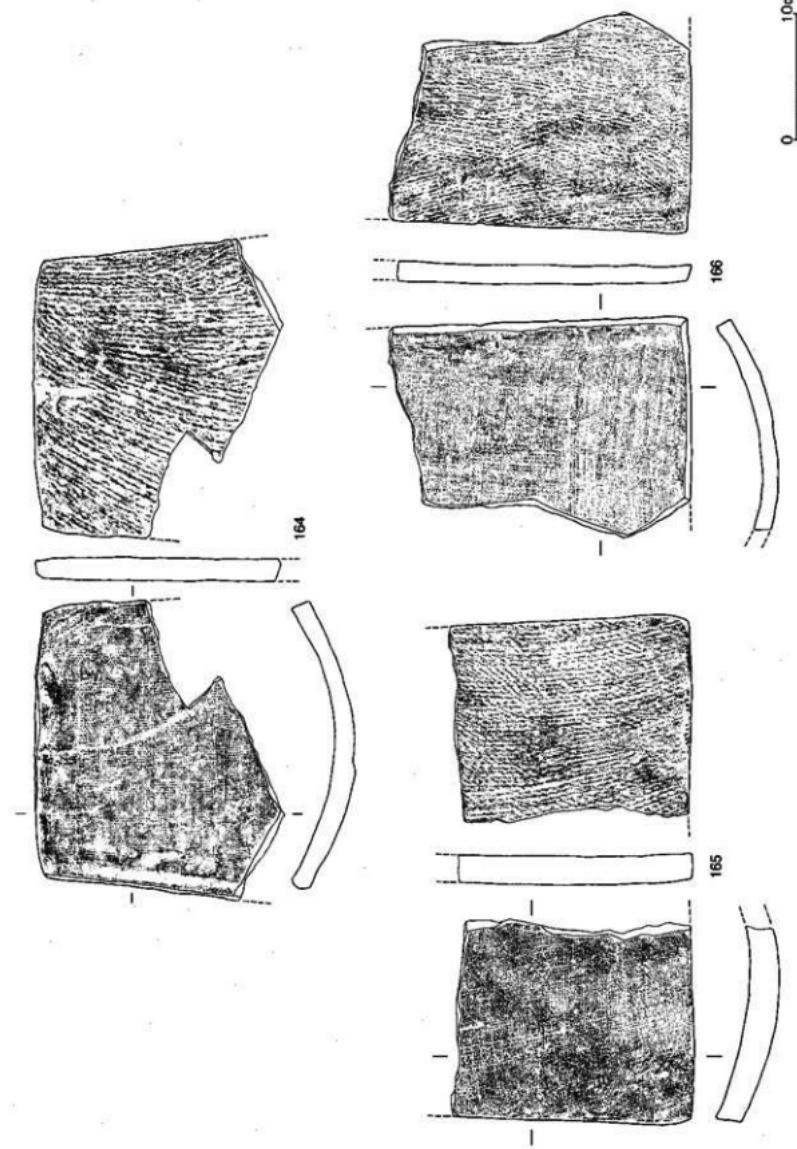
169



160

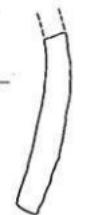
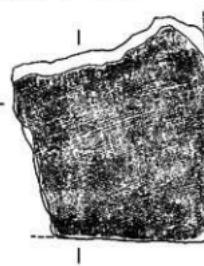
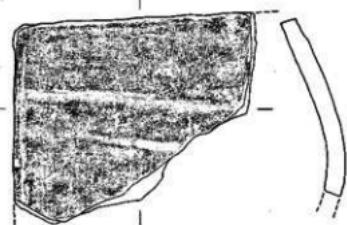
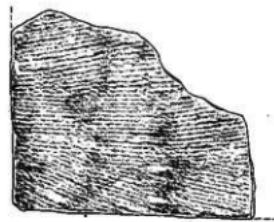
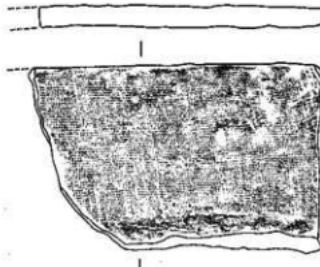
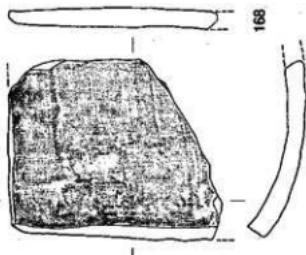
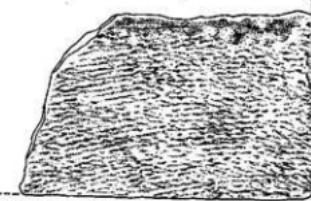


第17図 反原出土遺物11 (S=1/4)



第18圖 灰原出土遺物12 ($S=1/4$)

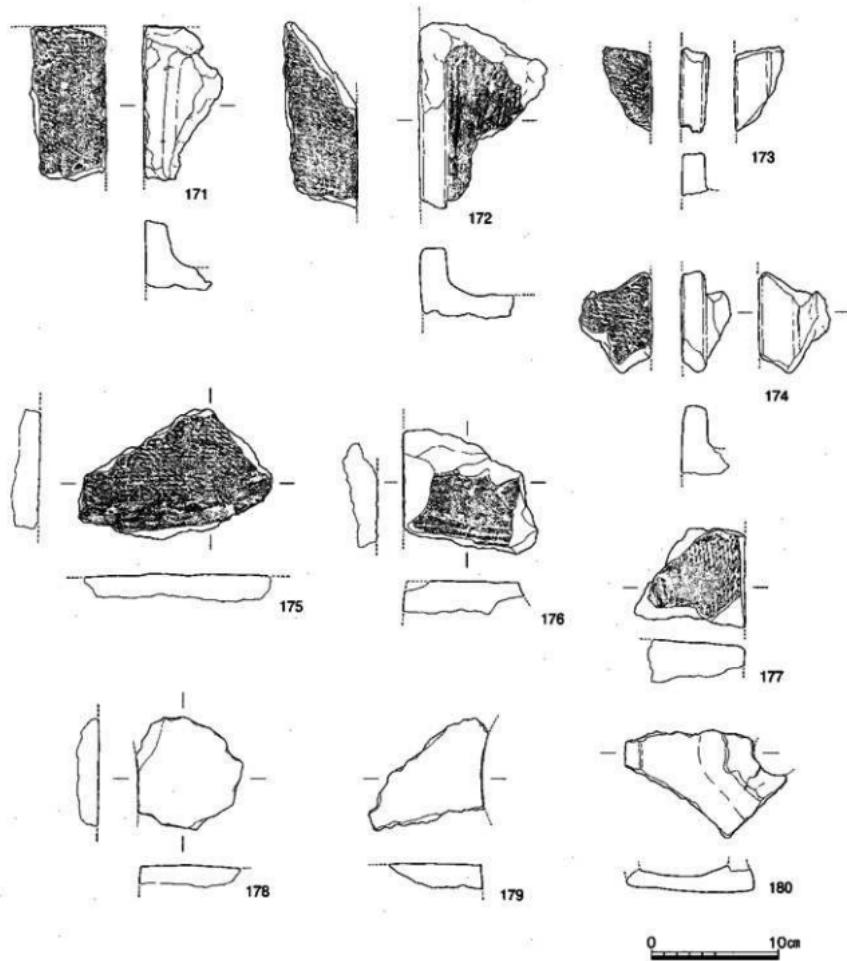
0 10cm



(2) 瓦類(第16~19図、図版6~7)

丸瓦(159~163)

出土している丸瓦はすべて行基丸瓦で、玉縁丸瓦はみられない。159はほぼ完形に復元できたもので、広端部から狭端部にむかって緩やかに狭まっており、全長は34.8cmを測る。凸面は丁寧に回転ナデが施されている。162は広端部周辺にかすかにタタキによる平坦面が残っている。凹面はいずれも不調整で、やや粗い布目痕がみられる。凹面の広端部は面取りが行われているが、側縁部内側では面



第19図 灰原出土遺物13 (S=1/4)

取りを行うものと行わないものがある。焼成は全体にやや軟質で、灰白色から灰褐色を呈するものが多い。また、163は丸瓦の凸面側に線刻がみられるもので、瓦の横方向に「一」「イ」と読める線がヘラ先によって描かれている。

平瓦(164～170)

全形のわかるものはないが、出土しているすべての平瓦には縄タタキ目と布目圧痕が残されている。縄タタキ目は、斜位にタタキを施したものがほとんどである。凹面の布目痕はやや目の粗いものが多いが、目の細かいもの(167)も少量含まれている。全体に焼成はやや軟質で灰色から黄灰色のものが多く、端部や側縁部の面取りは行われていない。

鶴尾(171～177)

小片であるためはっきりしないが、鶴尾ではないかと思われる破片である。焼成は多くの瓦類と同様にやや軟質なもので、灰白色～暗黄灰色を呈している。171～174は幅約2cm、高さ3.5cmほどの突蒂をもつ破片で、平坦な外面には平瓦と同質の縄タタキ目、内側は粗いナデを施している。175～177は剥離した破片である。175は平坦な面に縄タタキ目を施しており、端近くに弧状にナデを施しているものである。176・177はヘラケズリによる端面を有しているものである。

不明瓦(178～180)

器種のはっきりしない瓦質の破片である。178・179は平坦面をナデにより仕上げており、端面はヘラにより緩やかな弧状に削られている。これらは、上記の鶴尾したものと胎土、焼成等が似ており、あるいはそれらと同種のものかも知れない。180は両端に立ち上がりが剥離したような痕跡が残り、径4cmほどの円孔があけられているものである。

第3節まとめ

横内北窯跡群について

横内北窯跡群1号における今回の発掘調査は、農道改修工事に伴う小規模なものであり、灰原の一部を調査したに過ぎない。このため遺構については、灰原の下面から溝状の遺構と落ち込みが検出されたのみで、窯に直接関係するようなものはみられなかった。しかしながら、調査区西側の斜面には須恵器片とともに多くの窯体片が集中してみられる地点があり、残存状況はともかく当該灰原に伴う窯の本体が存在していることは地形の上からも明らかであろう。

横内北窯跡群の構成については、現況での表面調査でみると、1号窯の南側の斜面に10～15mほどの間隔をおいて須恵器片や窯体片が集中してみられる地点が2箇所あり、斜面の裾に平行して走る今回の工事区域内では灰原等の存在は確認できなかったものの、1号窯と平行するようにさらに2基の窯跡の存在を想定することができる。これらから採集される須恵器片は、1号窯とほぼ同時期のものも含まれていることから、近い時期に稼動していたことも考えられる。

また横内北窯跡群1号からは、先にみてきたように各種の須恵器とともに多くの瓦が出土している。備中陶窯跡群の中で、須恵器とともに瓦を焼成している窯は、地下式有段構造の窯をもつ寒山窯跡群3号をはじめとして、窓窯と平窯とが並存している黒土窯跡や真渕窯跡群1号・2号、陶神社南窯跡群等があり、奈良時代から平安時代にかけて瓦が生産されていたことが知られている。横内北窯跡群1

号もこうしたいわゆる瓦陶兼業窯のひとつとして捉えることができる。

須恵器について

出土した須恵器の器種には、壺蓋、壺、皿、高壺、鉢、壺蓋、壺、平瓶、甕、瓶などがあるが⁽¹⁾、全体に胎土が粗く、焼成も概してあまいものが多い。また成形の粗雑なものも多く含まれている。

高台をもつ壺Bは、法量により大小2種に分けられる。大きいものは口径16~17cm、器高6cm前後、径高指数33~39となっている。小さいものは口径13~14cm、器高4cm前後で、径高指数は27~30がほとんどを占めている。壺Bに伴う壺蓋は、平らな天井部に屈曲する口縁端部をもつもので、壺Bと同様に口径により18cm前後と15cm前後のものとの2種にわけられ、それぞれ大小の壺Bに対応しているものと思われる。また体部の形態が扁平な箱型となる壺Aは、底部をヘラで切り離したままのものが多く、焼成については軟質のものが目立っている。これらは口径13~14cm、器高3.5cm前後のものがほとんどで、径高指数は26~29となっており、壺類については法量の分化における単純化の傾向として捉えることができるだろう。

皿類については、高台をもつものともたないものとがみられた。ただ、高台をもつものについては、口縁部が屈曲し、端部を短く突出させる形態が、壺蓋と非常によく似た特徴をもっており、環状のつまみをもつ壺蓋との区別は明瞭にできなかったものもある。

鉢とよばれる鉢Aは、全体の形がわかるほどに復元できたものが2個体ある。底部は丸みをもった尖底で、内側して立ち上がる口縁部をもち、端部には面を有している。いずれも体部から底部にかけてカキ目が施されており、破片も含めて平城宮でみられるような体部をヘラ磨きしたものはみられなかつた。なお、鉢の体部の破片に、ヘラ描きにより「下」と読める線刻が描かれたものがあった。これは通常の「下」と同じ書き順で、力強く、しっかりとした線で刻まれている。「下」という字の意味合いについては、当窯跡がかつて『和名類聚抄』にみえる「下道郡穗北郷」の陶村にあたる位置にあるということからも、さしあたり想像されるのは「下道」ということになろうか。いずれにしても当窯跡で生産された製品は、下道郡を中心とした官衙等といつだけではなく、鉢や水瓶などの器種にみられるように仏器として寺院等へも供給されたと思われ、それらとの関係も注目される。

平瓶には大きさに大小があるが、いずれも高台が付けられ、幅広の板状の提梁を有しているものである。平城宮においては、高台のつく平瓶は平城宮IVに出現し、平城宮Vに一般化するとされており、また提梁をもつものについても平城宮IV以降で一般化するといわれている⁽²⁾。玉島陶窯跡群の中では、同様の形態の平瓶は黒土窯跡でも確認されているが、窯跡からの出土例は少ないものである。

甕については、大きさ形とも様々なものが出土している。中でも124~126は、胴の張らない長胴の甕の形状を呈しており、ヨコナデにより丁寧に消されているものもあるが、体部外面にはタタキ目、内面には同心円文が施されている。これらは、土師器の甕Cとされているものによく似ており、須恵器ではあまりみられない形態のものである。土師器を模倣してつくられたものと思われ、土師器工人との関わりも考える必要があろう。

また、大形の甕の130~139では、胴部と口頸部を別々に成形し、後に接合した痕跡がみられた。口頸部の断面をみると、別作りの口頸部は胴部上端部の径よりやや大きめに作られ、胴部の上面に直接のせ、内側の胴部上端の出っ張り部分に補強用の粘土を貼り付けるという手法で作られていること

がわかる。別作りの口頸部を胴部の上にのせるためには、口頸部の自重によって胴部上面がへたらないようにある程度乾燥が行われたのちに接合が行われたものと考えられ、このため口頸部下端の面で剥離している破片が多くみられる。長頸口頸部をもつ大甕の口頸部成形技法については、胴部に直接口頸部をのせるのではなく、接合部分で胴部と別作り口頸部の間に接着粘土を入れるという手法が一般的であるとされている⁽³⁾。しかしながら、当窯跡の大甕では頸部が短いものであるためか、出土資料をみると、別作りの口頸部は直接胴部の上にのせられ、内側を粘土により補強するという手法で成形されており、大形甕における特徴的な成形技法のひとつとみられる。

こうした横内北窯跡1号の灰原から出土した一連の須恵器については、その形態や特徴などから同じ玉島陶窯跡群の黒土窯跡や総社市新本にある横寺遺跡⁽⁴⁾、上竹西ノ坊遺跡⁽⁵⁾などから出土している須恵器に類似するものが認められる。特に、横内北窯跡群から丘陵をはさんで北に9kmほど離れた総社市新本にある横寺遺跡は、圃場整備に伴う発掘調査により7世紀末葉の掘立柱建物群などが確認され、下道評衝の可能性も指摘されている遺跡である。このうち、焼失した建物に伴い一括廃棄された土器とされるSB01出土の須恵器は、横内北窯跡群1号出土の須恵器との類似が指摘されており⁽⁶⁾、胎土や焼成等からみて当窯を中心とした玉島陶窯跡群の製品が供給された可能性が高いものである。これらでみられる須恵器には8世紀第4四半期の年代が比定されており、灰原の一部の資料に過ぎないが、出土須恵器をみると横内北窯跡群1号についても概ねこの時期を中心に稼動していたものと考えられる。

瓦について

出土した瓦には、丸瓦と平瓦、鶴尾と思われる破片などがあるが、軒先瓦類は検出されていない。丸瓦については形状が確認できる中ではすべて行基丸瓦である。丸瓦のうちほぼ完形に復元できたものがあり(159)、これをみると全長は34.8cm、広端部14.6cm、狭端部約8.5cmで、緩やかに狭まっており、全体にやや細長い感じのものとなっている。また、丸瓦片に線刻が描かれたもの(163)が1点みられた。それは、丸瓦の凸面にヘラ先によって「一」と「イ」とみえる文字が、側面と直角方向に刻まれているものであるが、それらが何を意味しているかについてははっきりしない。

一方、平瓦は全体の大きさがわかるほどに復元できたものではなく、規格等については不明であるが、凸面にはすべて繩タタキ目が施されている。また、小片であるためはっきりしないが、鶴尾と思われる破片が出土している。これらには、平瓦と同種の繩タタキ目が施されており、全体に焼きがあまく、灰白色を呈しているものが多い。このように、瓦については軒先瓦の出土がみられなかつたため、時期の特定については明確になし得ないが、当窯跡が瓦陶兼業窯であるとすれば、伴出している須恵器類とほぼ同じ時期ということになろう。

備中地域には飛鳥時代以来、奈良・平安時代にかけての古代寺院が多く存在しており、須恵器に限らず、それらに供給する瓦についても玉島陶窯跡群において生産されていたことは、いくつもの窯跡から瓦が出土することから明らかである。しかしながら、備中地域で唯一継続した生産が行われた窯跡群であるにもかかわらず、それらの供給先である寺院や官衙等の具体的な遺跡については、窯跡の調査例が少ないこともあり、未だ明らかにされているとはいがたい状況である。

ただ、平安時代後半期になると玉島陶窯跡群のうち、大堂窯跡ないしは陶神社南窯跡から出土した

とされる宝相華文軒丸瓦や単弁六葉蓮華文軒丸瓦、宝相華文軒平瓦などが、倉敷市浅原にある朝原寺跡の中でも最も古いタイプの軒瓦と同型であることが判明しており、それらはこの地から供給されたものと考えられている¹⁷⁾。また、このほかにも箭田廃寺出土の蓮華文軒丸瓦や大内田廃寺の複弁四葉軒丸瓦、さらには平安京の尊勝寺の宝相華文軒平瓦などもについても玉島陶窯跡群で焼成された可能性が指摘されている。

須恵器については、一般に8世紀後半から製品の粗雑化が進み、また器形の法量分化も乏しくなってくるなどの指摘があり、横内北窯跡群1号でみた時期以降には、その生産は次第に縮小していく傾向にあるといわれている。その一方で、玉島陶窯跡群においては、瓦の生産については、それ以降の少なくとも平安時代後期頃までは継続的に生産が続けられたと考えてもよいかもしれない。

いずれにしても、今回灰原から出土した須恵器や瓦は、県内では窯跡からの出土品としては例の少ない時期のもので、まとまった資料として注目されるものであるといえる。

註

- (1) 本書を通じて須恵器の器種分類については、下記を参考にした。
奈良国立文化財研究所報告『平城宮発掘調査報告VII』1976
奈良国立文化財研究所報告『平城宮発掘調査報告XI』1982
- (2) 西弘海「土器様式の成立とその背景」真羅社 1986
- (3) 大甕の口頭部の成形において、接合部分で胴部と別作り口頭部の間に接着粘土を入れるという手法は、望月精司氏により「A工程」と呼ばれ、長頸口頭部を成形する場合では主流であるとされている。
望月精司「須恵器甕の製作痕跡と成形方法」「北陸古代土器研究第9号」北陸古代土器研究会 2001
- (4) 武田恭彰「横寺遺跡」「総社市埋蔵文化財調査年報3」総社市教育委員会 1994
- (5) 井上弘他「上竹西ノ坊遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69」岡山県教育委員会 1988
- (6) 玉島陶窯跡群を含め、吉備地方の古代土器については武田恭彰氏による精緻な研究が行われており、本報告書の作成にあたっては、下記をはじめとして一連の著作を参考にさせていただいた。
武田恭彰「奥坂遺跡群」「総社市埋蔵文化財調査年報15」「総社市教育委員会 1999
武田恭彰「三須河原遺跡・三須畠田遺跡・三須美濃田遺跡」「総社市埋蔵文化財調査年報16」「総社市教育委員会 2003
- (7) 間壁蘗子「備中スエと瓦」「倉敷の歴史」倉敷市史紀要第2号 1992

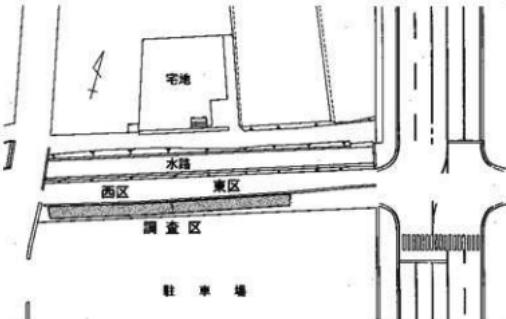
第3章 下庄遺跡の調査

第1節 発掘調査に至る経緯と経過

下庄遺跡は從来、上東遺跡の一部として周知されていた。しかし、岡山県古代吉備文化財センターが実施した主要地方道箕島高松線道路改良に伴う発掘調査では、字名に対応させて上東遺跡、下庄遺跡と呼び分けられている。今回はこれに従い、下庄遺跡として報告を行う。

発掘調査の契機となった市道下庄1号線改良工事は、倉敷市建設局土木部土木課を担当部署として計画された。事業計画の内容は、既存の道路を南側に2.5～3m拡幅するもので、施工範囲は延長68m、幅8mに及ぶ。折しも東側には主要地方道箕島高松線が整備されたばかりで、その西側を並行する市道上庄東浦線との接続の便を図る道路改良工事である。平成12年4月に倉敷埋蔵文化財センターとの間で埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行われた。それにより、道路拡幅部分について確認調査を行い、遺跡の存在状況を明らかにしたうえで具体的な協議を行うことになった。そして、同年4月19日付けで埋蔵文化財の存在状況確認調査依頼書が提出され、これを受けて倉敷埋蔵文化財センターは、5月30日に確認調査を実施した。調査では、トレンチを2箇所設定して行い、遺物包含層が検出されたため、遺跡は工事予定区域内全面に存在すると判断された。この結果を踏まえ、土木課の担当者と倉敷埋蔵文化財センターとで再び協議が行われた。今回の事業は先述の主要地方道と市道との接続を強化するといった公共性が高いもので、設計変更が不可能であることからやむを得ず道路拡幅部分について全面発掘調査を実施し、記録保存することになった。

発掘調査を行う上でいくつかの問題が挙げられ、特に①発掘作業スペースとして既設道路部分を使用しなければならないこと。②周辺に残土置場が確保できないこと。が大きな障害であった。①については、調査作業中には東西進入口にバリケードを設置して自動車の通行を一時的に封鎖する形をとりながら、歩行者や二輪車に対しては適宜通路を開け、一日の作業終了後にはもとの通り通行可能な状態に戻すこととした。②については、まず、表土層の造成土および水田耕作土を重機で除去してトラックで搬出した後、東半分のみを先に進めていき、終了するとその場所を西半分の調査の土置場として利用するという方法を計画した。調査区全体の様子が同時に見渡せないなど、記録をするうえで支障が生じるが、次善の策として取り入れることにした。道路の安全管理に気を配りながら発掘作業を進めるというのはこれまで経験がなかったが、トラブルもなく無事に作業を進められた



第20図 調査区位置図 (S=1/1,000)

のは幸いであった。

全面発掘調査は、平成12年7月4日から7月29日まで実施した。東区（面積52m²）の調査は7月4日から7月22日まで、西区（面積54m²）の調査は7月18日から7月29日までを要した。調査予定地の東端に機材収蔵用のテント、簡易トイレを設営して調査を進めていき、最後に移動させてこの場所を調査する予定であったが、東区での遺構密度が希薄だったため東端部分は未調査である。

なお、調査区を便宜上東西に分けて調査を行ったことをこれまで記したが、次節からは東調査区、西調査区といった区割り名称は用いない。

調査日誌抄

平成12年5月30日 トレーナー2箇所による確認調査。

7月4日 全面調査開始。造成上除去搬出作業開始。

7月6日 水田耕作土の除去搬出作業開始。

7月12日 東区から掘り下げ、遺構検出作業開始。

7月13日 東区で遺構（ピット4基）検出、写真撮影。

7月15日 東区の全景・南壁の写真撮影。

7月18日 東区検出の遺構実測および遺構配置図作成。西区で掘り下げ、遺構検出作業開始。遺物包含層を検出。

7月22日 西区で遺物包含層の掘り下げ開始。土坑2基検出。東区南壁の実測。

7月26日 西区で基盤層の落ちを検出。落ち際に細い溝を検出。

7月27日 西区で検出された遺構等を全て完掘し、写真撮影。西区の全景・南壁の写真撮影。

7月28日 西区南壁の実測および遺構配置図作成。

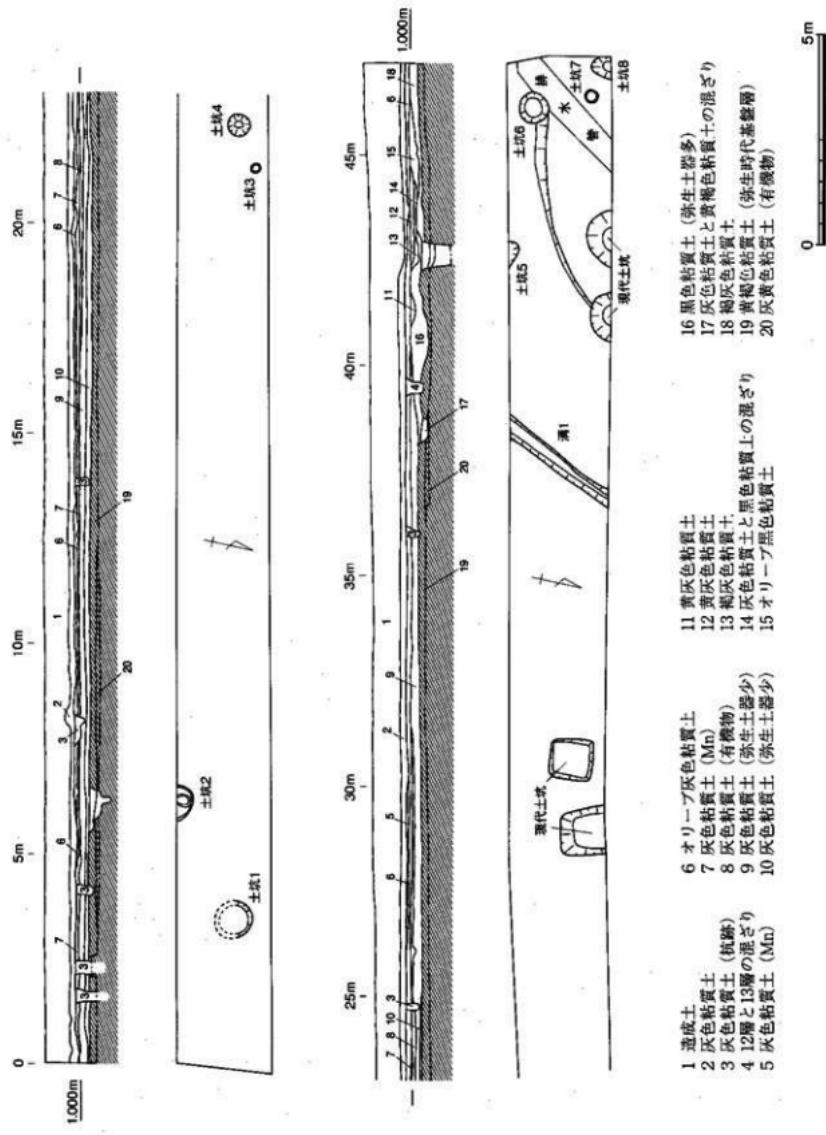
7月31日 発掘調査機材を撤収し、調査作業終了。

第2節 発掘調査の概要

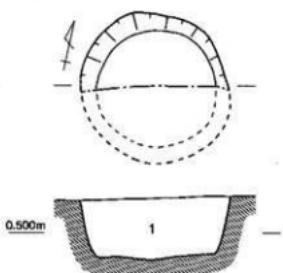
1. 出土遺構

調査地は、倉敷市下庄69-10に所在する。小字名は樋田である。下庄遺跡は、北側に存在する岩倉遺跡から上東遺跡に続く一連の遺跡群の南端に近い部分にあたると考えられる。これより200m南で実施した印刷工場増設に伴う確認調査では、基盤層は認められるものの、弥生時代の遺物、遺構は発見されていない。また、東隣の主要地方道箕島高松線道路改良に伴う発掘調査の調査区において、南に行くにしたがって遺構密度が薄くなることが判明している。

さて、今回発掘調査を行った調査区は、幅約2.2m、長さ47mの規模で、東西方向に細長い1本のトレーナーを入れるかたちとなった。調査の結果、標高80cmあたりに弥生時代の基盤層が存在することが明らかとなり、遺構は判然としないものまで含めると土坑8基、溝1基が検出された。調査区の幅の狭さもさることながら、全体としては遺構の密度や遺物の分布密度は希薄である。そのような状況の中で、調査区の西寄りで検出された東西方向に延びる細い溝1を境にして遺構、遺物の疎密を分けるようなあり方は発掘調査時において注意された。溝1から西側ではわずかに低くなり、この凹みの輪郭がどのような形状をなし、他の遺構と有機的関係をもつかどうかを追究することがひとつ課題であった。しかし、結局は西側で湾曲するような不可解な形でしかとらえることはできず、周辺の土坑との関連も明らかにすることはできなかった。凹みの中には、調査区南壁断面で示されるように

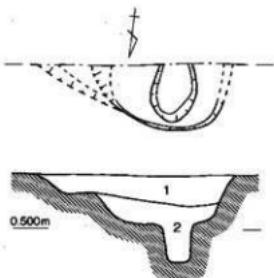


第21図 調査区遺構配置図・南壁土層断面図 (S=1/120)



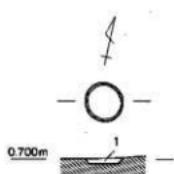
1 黒褐色粘質土
(灰色粘質土のブロックが混じる)

土坑 1

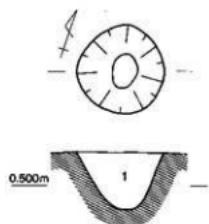


1 黒褐色粘質土 (混黄褐色粘質土)
2 暗灰色粘質土

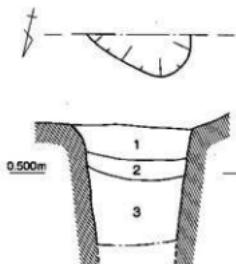
土坑 2



1 黒褐色土
土坑 3

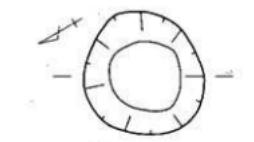


1 黑褐色土
土坑 4



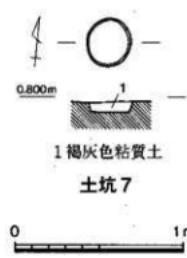
1 黒褐色粘質土
2 灰色粘質土 (混褐灰色粘質土)
3 暗灰色粘質土

土坑 5



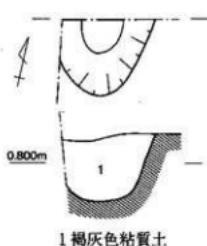
1 暗灰色粘質土 (弥生土器)
2 灰色粘質土 (弥生土器)
3 暗灰色粘質土 (弥生土器)

土坑 6



1 暗灰色粘質土
土坑 7

0 1 m



1 暗灰色粘質土

第22図 土坑実測図 (S=1/30)

凹凸が認められ、埋土には弥生後期の土器が入り込んでいた。その遺物密度は調査区の中で最も高いのであるが、ほとんどが小片であり、出土状況を記録するほどの保存状態ではないと判断した。一方、調査面積の約3/4を占める溝から東側の区域では、特筆すべき遺構、遺物包含層ではなく、摩耗した弥生土器片を少量取り上げ、4基の土坑を検出したに過ぎない。

以上の状況から、当該地に残された活動跡の本体がおそらく調査区の西あるいは北西側にあったと考えられる。

(1) 土 坑

土坑は小さなものまで含めると12基検出されたが、そのうち4基はい草の泥染め用として昭和期に使用されたものと考えられるので、今回の報告では8基を記載する。土坑1～4・7・8は出土遺物がなく、時期の決め手に欠けるが、土坑2以外は弥生時代後期の可能性がある。土坑5・6は弥生時代後期と考えられ、土坑5は井戸の可能性がある。

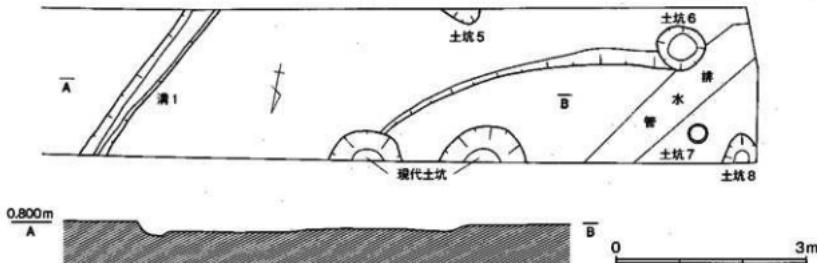
土坑1 確認調査のトレンチにより南半分を調査済み。確認調査では、断面で輪郭がとらえられず、擾乱坑とも考えられたが、今回は土坑として報告する。平面形は円形で直径80～90cm、深さは35cm。底は平坦である。内部には黒褐色粘質土に灰色粘質土のブロックが混じり、土層の変化はみられない。出土遺物はないが、弥生時代後期の可能性がある。

土坑2 調査区南壁際で一部が検出される。上面が破壊されている。平面形は不整円形で、径80cm程度の規模。中央に柱あるいは杭を抜き取ったような跡がみられる。出土遺物がなく、時期は不明であるが、埋土がグライ化した褐灰色粘質土で、他の土坑に比べて時期が新しい可能性がある。

土坑3 平面形は円形で、直径20cm。残りの深さは3cm。内部には黒褐色土が含まれる。出土遺物はないが、弥生時代後期の可能性がある。

土坑4 平面形は不整円形で、径50cm程度。深さは34cmで丸底状。内部には黒褐色土が含まれる。出土遺物はないが、弥生時代後期の可能性がある。

土坑5 調査区南壁際で一部が検出される。底は調査区外にあるため、掘り下げは途中までとなつた。規模、深さは不明であるが、埋土はグライ化しており、井戸の可能性がある。出土遺物については、1層～3層まで弥生時代後期の土器が少量含まれるが、図化できるものはない。調査区南壁の断面を観察すると基盤層の直上に堆積する褐灰色粘質土層(18層)を掘り込んでいる。



第23図 調査区西端遺構配置図 (S=1/80)

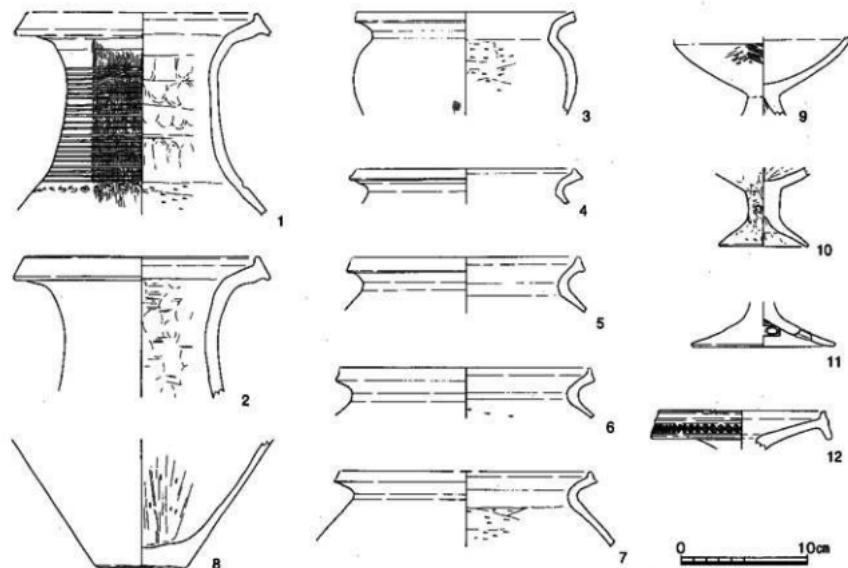
土坑6 平面形は不整円形で、径70cm程度。深さは60cmで、底は平坦。埋土は3層に分けられ、2、3層はグライ化している。1・2層からは比較的多くの弥生時代後期の土器が出土したが、小片が多く全体的に保存状態が悪い。

土坑7 平面形は円形で、直径28cm。残りの深さは6cm。内部には褐灰色粘質土が含まれる。出土遺物はないが、弥生時代後期の可能性がある。

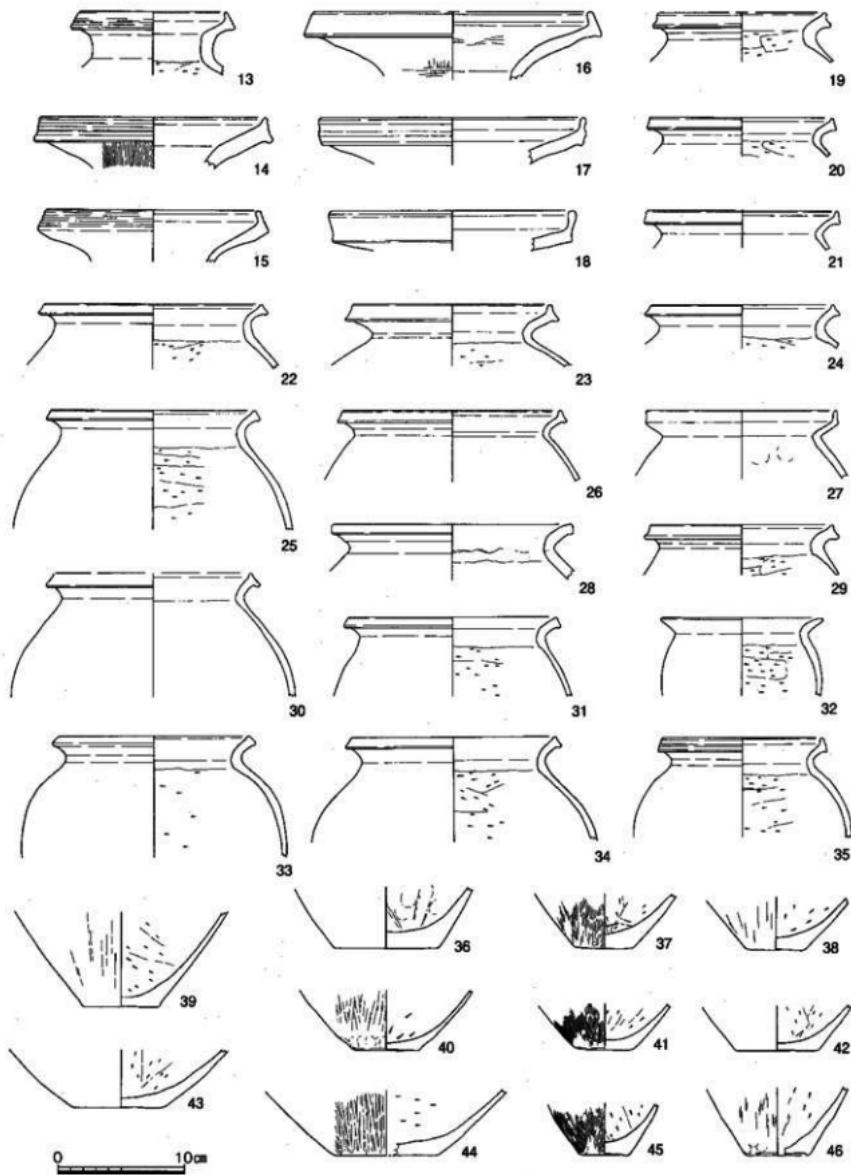
土坑8 調査区北西隅壁で一部が検出される。平面形は不整円形で、規模は不明。深さは40cmを測る。底は丸底気味で、内部には褐灰色粘質土が含まれる。出土遺物はないが、弥生時代後期の可能性がある。

(2) 溝1とその周辺の状況

溝1は幅35cmで、深さは、東肩から20cm、西肩から8cm程度である。埋土は灰色粘質土と黄褐色粘質土が混ざり、よく縮まっている。遺物は出土していないが、弥生時代後期のものと考えられる。溝から西では基盤層が10cm程度低くなり、この凹みの西側の肩は内に向かって弧を描くような形状をなし、北側に円形状の高まりを形成しているようにも見える。この高まりの上に土坑7・8が、凹みの中に土坑5・6が存在するのである。凹みの底は、調査区南壁断面で示されるように凹凸が認められ、埋土の黒色粘質土（第16層）には弥生後期の土器が入り込んでいた。これらの土器の保存状態は概して悪く、二次的に廃棄されたものかもしれないが、この層を遺物包含層とした。



第24図 土坑6出土土器 (S=1/4)

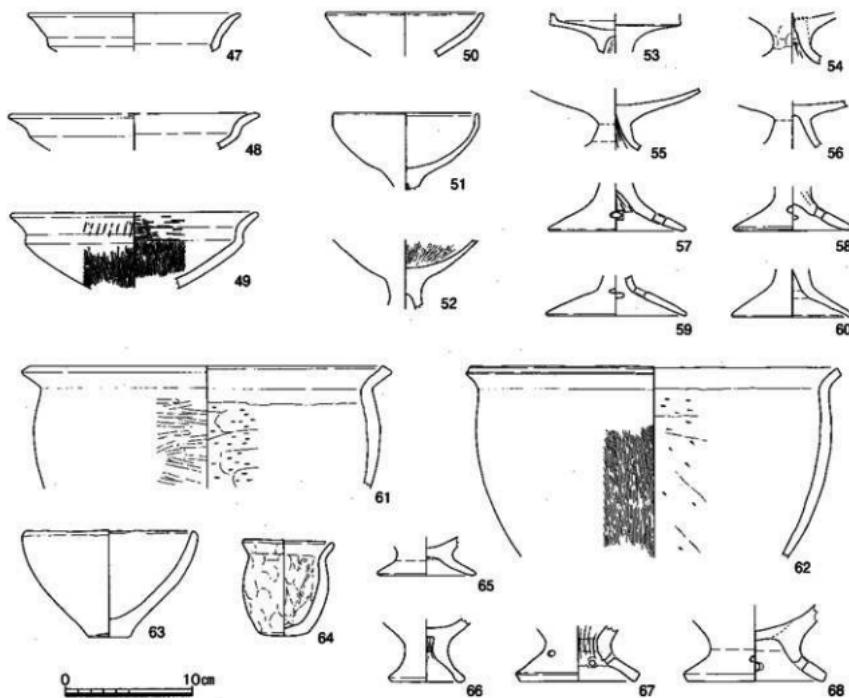


第25図 包含層出土土器 1 (S=1/4)

2. 出土遺物

(1) 土坑6出土土器 (第24図、図版11)

土坑6からは比較的多くの出土遺物がみられたが、全体的に保存状態が悪く、図化できたのはわずか12点である。1・2は長頸壺である。1の頸部には沈線が巡る。一周する線が一度に4本ずつ描かれているとみられ、全部で24本を数える。2は表面が剥離している。3~7は甕である。8はおそらく甕の底部で、外面に煤が付着し、内面には炭化物が付着している。9~11は高杯である。10の脚部には直径約3mmの円形様の刺突が連続して施されている。この刺突文を上からたどると、脚柱上端から下端まで垂直に降り、裾部との境を水平方向にめぐりながら斜めに上がり、垂直方向の刺突列に接して終わる。これ以外にも裾部に刺突が散見されるが、どのような文様構成になるのかは不明である。12は器台と思われる。拡張された口縁の下段に菱形文が巡る。沈線の切り合いを観察すると、「×」を連続的に一巡させてできた菱形内に右上がりの斜線を充填している。内面にはヘラミガキ、外面にはハケメが放射線状に施される。



第26図 包含層出土土器2 (S=1/4)

(2) 包含層出土土器(第25・26図、図版11)

第16層を中心とした遺物包含層からは弥生土器が多く出土したが、保存状態は悪く、調整がほとんど観察できないものが多い。器種別にみると壺の個体数が最も多く、壺、高杯、鉢類は少量である。13～18は壺である。13は小形の短頸広口壺で、口縁部に凹線が巡る。14は、1と胎土、色調が共通しており、長頸壺と思われる。15～18も長頸壺または広口壺の口縁部であるが、詳細は不明である。時期が下るものも含まれるであろう。19～35は壺である。口縁部の形状により、図化していない資料も含めていくつかのグループに分けられる。27は弥生時代終末まで下るであろう。36～46は壺または壺の底部である。47～56は高杯で、57～60も高杯の脚部と思われる。54には杯部の中央に焼成前の穿孔がある。孔の直径は3mm程度で、杯底から脚柱の中軸をねらって孔を開けている。58にも同様の焼成前穿孔があるが、中軸から大きくはずれて斜め方向に開けられている。残存部分からは貫通しているかどうかわからない。61～63は鉢である。61、62の外面には黒斑があり、62では胎土内部まで黒色を呈する。64は手捏ね土器で、壺と思われる。65～68は脚台で、台付鉢あるいは台付壺・壺といった器種が候補としてあげられる。なお、弥生土器の他に平安時代後期の内面黒色土器碗の底部小片が1点出土している。

第3節 まとめにかえて

平成9年から10年にかけて実施された、主要地方道箕島高松線に伴う発掘調査等により上東遺跡の南端部の微高地が確認され、字名が下庄となる場所については下庄遺跡と呼ばれている。今回発掘調査を行った地点は、山陽新幹線「亀川調査区」の南約800m、県道倉敷岡山線の北約300m、主要地方道箕島高松線「下庄I-a区」の西隣に位置する。同「上東I-c区」で発見された波止場状遺構のわずか250m南ということもあり、どのような土地利用がなされたかが今回問題視された。調査の結果、標高80cm付近に弥生時代の基盤層が存在することが明らかとなり、全体的には遺構や遺物の密度が希薄ではあるが、調査区の西端においては土坑、溝、遺物包含層が検出された。土坑には、井戸の可能性も考えられる深くしっかりとしたものがあり、居住域から離れているにしろ、何らかの活動痕跡がうかがわれた。調査区が狭小なため、検出された遺構の追究が十分でなかった点が悔やまれるが、さらに西側へ遺構群が広がることが想定される。

出土遺物については、土器以外にみられなかつたが、完形品は皆無で、その保存状態の悪さから二次堆積の可能性も否定できない。遺構の廃絶後、しばらくして土器片を含む土砂が周辺から流れ込んだことも考えられる。時期としては弥生時代後期中頃から終末までで、比較的短期間の利用であった。杯部に焼成前穿孔のある高杯2点が出土した。直径3mm程度の小さな孔で、液体を容れなければ使用上問題はないが、杯部底から脚部に向けて意図的に穿孔されているようである。これら以外には焼成前・後の穿孔は認められないが、上東遺跡の波止場状遺構から出土した焼成後穿孔の土器との関連を想起させる。波止場状遺構では、出土した全ての器種に焼成後穿孔が認められ、鉢や高杯などは内面から、他の器種は外側から敲打あるいは錐を用いて穿孔が行われていた。報告書では、土器の穿孔を波止場状遺構にまつわる祭祀行為であり、複数人で一つの土器に孔を開ける場合もあったとの考えが示された。今回の出土例の場合は、波止場状遺構例とは相違点が多いが、注意すべき資料と思われる。

第4章 上東遺跡の調査

第1節 発掘調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

平成12年4月、建設局土木部土木課より上東遺跡の範囲内で市道の新設工事を予定しており、これに係る遺跡の取り扱いについての照会があった。上東遺跡は、これまでに山陽新幹線や都市計画道路等の建設に伴う岡山県教育委員会による発掘調査で、数多くの遺構とともに膨大な量の遺物が出土しているが、今回の建設予定地は上東遺跡の中でも比較的遺構密度が希薄な「田所地区」及び「下田所地区」のすぐ北側にあたっていた。こうした状況をふまえ、平成12年5月上旬にトレンチ2箇所による確認調査を行ったところ、弥生時代と思われるピット3基が確認され、遺跡が今回の計画地にまで延びていることが明らかとなった。この調査結果に基づき、5月末に土木課と遺跡の保存を含めた対応について再度協議を行った。しかし、山陽新幹線の南側に新設される都市計画道路が開通すれば、それを南北に貫通する道路が交通安全上必要であること、また、その建設について地元住民の要望が強いことなどから計画の変更は困難で、遺跡に係る部分についてやむを得ず発掘調査を行い記録保存とすることになった。

2. 調査の経過と概要

5月9日から10日にかけて、事前の確認調査を行った。調査は、道路建設予定地内に 2×2 mのトレンチを2箇所設定して行った。その結果、どちらのトレンチにおいても水田耕作土直下に、微高地を形成する砂質土が認められ、トレンチ2ではこの層を掘り込んで弥生時代のピット3基が検出された。このような状況から、水田の地下げと思われる削平により上層部分は消失しているものの、弥生時代を中心とした生活遺構の下部構造は残存していると考えられた。

この確認調査の結果を受け、本発掘調査は新設道路部分全てを対象としたが、当該対象地は東西に走る用水路と農道により南北に分割されていたため、南側の調査地を1区、北側の調査地を2区としてそれぞれ調査を行った。

1区の調査は、稲刈り後の平成12年11月7日から11月28日にかけて実施した。5月に行っ



第27図 調査区位置図 (S=1/1,000)

た確認調査により、既に遺構の上面が削平されていることが明らかとなっていたため、まず重機によりこの削平面まで掘り下げた後、遺構を精査する方法で調査を行った。1区からは、弥生時代のピット11基と6基の土坑のほか、中世と思われる2基の溝が検出されたが、概してその密度は希薄であった。これらの遺構は全てその上面が削平されており、また、水田の暗渠や近現代の穴等によって一部破壊を受けているものもあった。

1区の調査に引き続き、2区の調査を平成12年11月29日から12月7日にかけて実施した。調査区の範囲内には古い作業小屋が建っていたため、この小屋の撤去と造成土の除去を行ったうえで、1区と同様の方法で調査を実施した。2区からはピット9基と土坑2基のほか、中世の溝1基が検出されたが、1区と同様それらの上面は全て削平を受けていた。

調査日誌抄

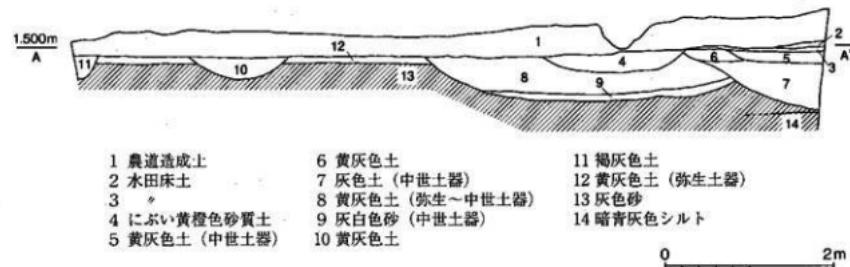
平成12年11月7日	機材搬入。1区耕作土剥ぎ。	11月28日	遺構平板測量。調査区断面図実測。
11月8日	遺構検出作業開始。	11月29日	2区調査開始。
11月10日	近・現代搅乱坑掘り下げ。	11月30日	弥生遺構検出作業開始。
11月21日	弥生遺構掘り下げ開始。	12月5日	弥生遺構掘り下げ開始。
11月24日	弥生土坑掘り下げ。実測・写真撮影。	12月6日	調査区全体写真。遺構平板測量。
11月25日	調査区全体写真。	12月7日	機材搬出。

第2節 1区の調査

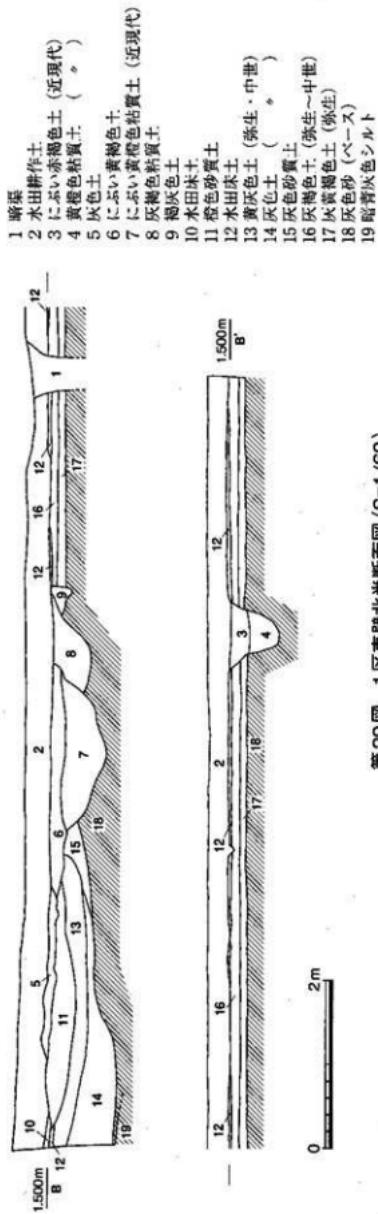
1. 調査区の概要

1区は、新設道路部分の内、都市計画道路富本町・三田線から東西に走る農道までの部分をその範囲とした。広さとしては南北約34m、東西約5mであるが、道路の形状に合わせ北側1/3からは徐々に幅が広くなり、北端では東西約9mを測る。調査面積は約187m²である。

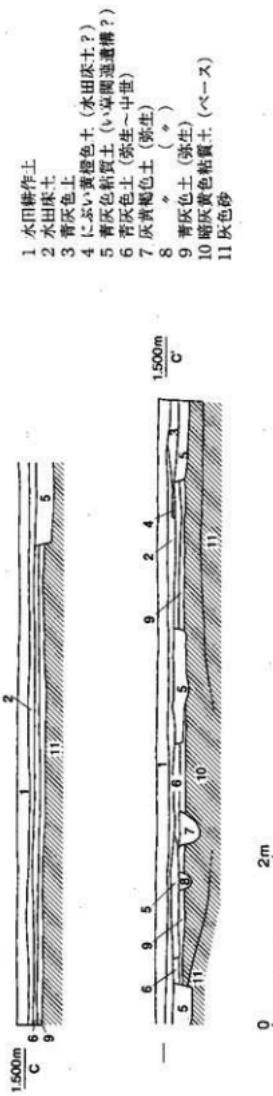
調査区の基本的土層は、上から水田耕作土・水田床土・灰褐色土・黄灰色土・灰色砂質土（ベース）となるが、調査区北壁断面では灰褐色土層は認められない。灰褐色土には弥生時代から中世にかけての遺物が比較的多く含まれているが、それらの多くは細片で、また土層の厚さも10cm程度と薄いことから、後世の削平（水田の地下げ）に伴う土層と考えられる。この削平面の下にある黄灰色土（灰



第28図 1区北壁断面図 (S=1/60)



第29図 1区東壁北半断面図 (S=1/60)



第30図 1区東壁南半断面図 (S=1/60)

黄褐色土）には弥生時代の遺物のみが含まれているが、いずれも概して小片で摩耗しているものが多く見られることから、周辺より流れ込んだものである可能性がある。なお、上東遺跡のベースとなる灰色砂質土は、調査区の全域で標高約1.3mの高さでほぼ水平に堆積していた。

検出された遺構としては、ピット11基・土坑6基・溝2基があるが、密度的にはそれほど高くなく、調査区内に散漫に分布している状況であった。これらは先にも述べたとおり、全て上面が削平されており、加えて調査区内を東西南北に走る水田用暗渠や、い草に関連すると思われる近現代の穴等によって一部破壊を受けるなど、残存状況はあまり良くなかった。

なお、調査区の北東端で、2基の切りあう土坑状の落ち込みを確認した。どちらも調査区外へ延びているため、その性格等については不明であるが、出土した土器から中世にさかのぼる可能性がある。

2. 検出された遺構と遺物

(1) ピット

検出されたピットは全部で11基で、直径は20~70cm、深さは9~26cmである。調査区南端にやや集中する傾向があるものの、全体的に散漫な分布を示す。ピット2・10を除き弥生土器が出土しているが、いずれも細片で図化し得なかった。これらのピット群は、層位や検出状況からほぼ同時期のものと思われ、ピット8・9から出土した土器片により、弥生時代後期初頭頃と考えられる。

(2) 土坑

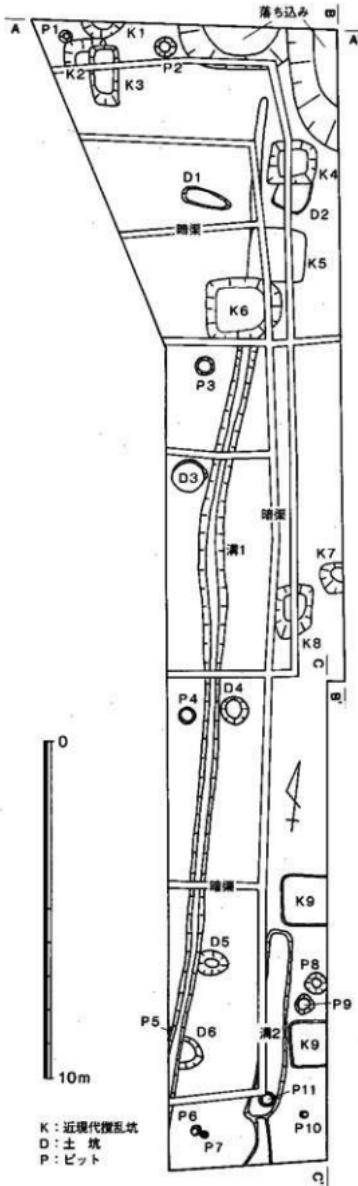
土坑は全部で6基検出されたが、ピットと同様その分布状況に特徴はない。これらの内、土坑3・4・6については、多くの土器片とともにその埋土には炭が含まれており、貯蔵穴である可能性が高い。

土坑1

調査区北端近くに位置する。150×52cmの楕円形を呈し、深さは13cmと浅い。細片のため図化し得ないが、弥生後期初頭の土器片が少量出土している。

土坑2

土坑1のすぐ東に位置し、近現代の搅乱坑によりその一



第31図 1区遺構配置図 (S=1/150)

部が破壊を受けている。幅1m程度の方形状を呈すると思われ、深さは15cm程である。弥生後期初頭の土器片が少量出土している。

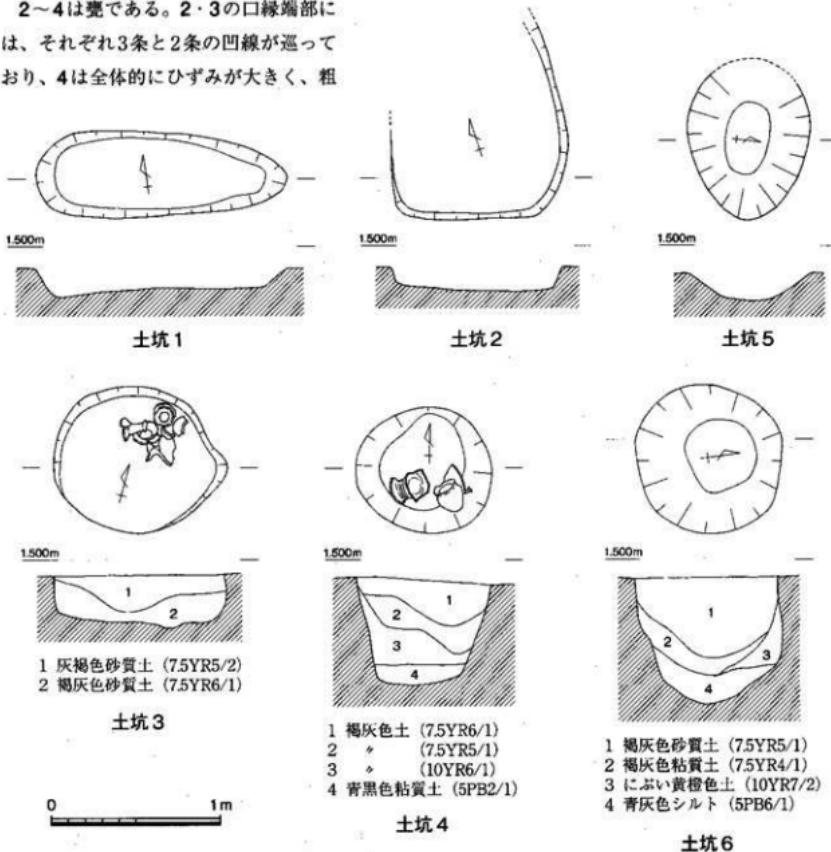
土坑3

調査区中央部近くの西壁寄りで検出した。形状は直径90cm程度の円形を呈するが、東側がわずかに外に張り出している。深さは現状で約30cm、底はほぼ平坦である。埋土は2層に分けられ、下層には土器片とともに木炭が多く含まれていた。

出土遺物としては弥生土器の壺・甕・高杯・器台などがあるが、図化できたのは16点である。

1は小形の壺になると思われる。わずかに外側に開く口縁部はその端を丸く収めており、胴部には直径4mm程度の竹管文が認められる。頸部以下の内面にはヘラケズリが施されている。

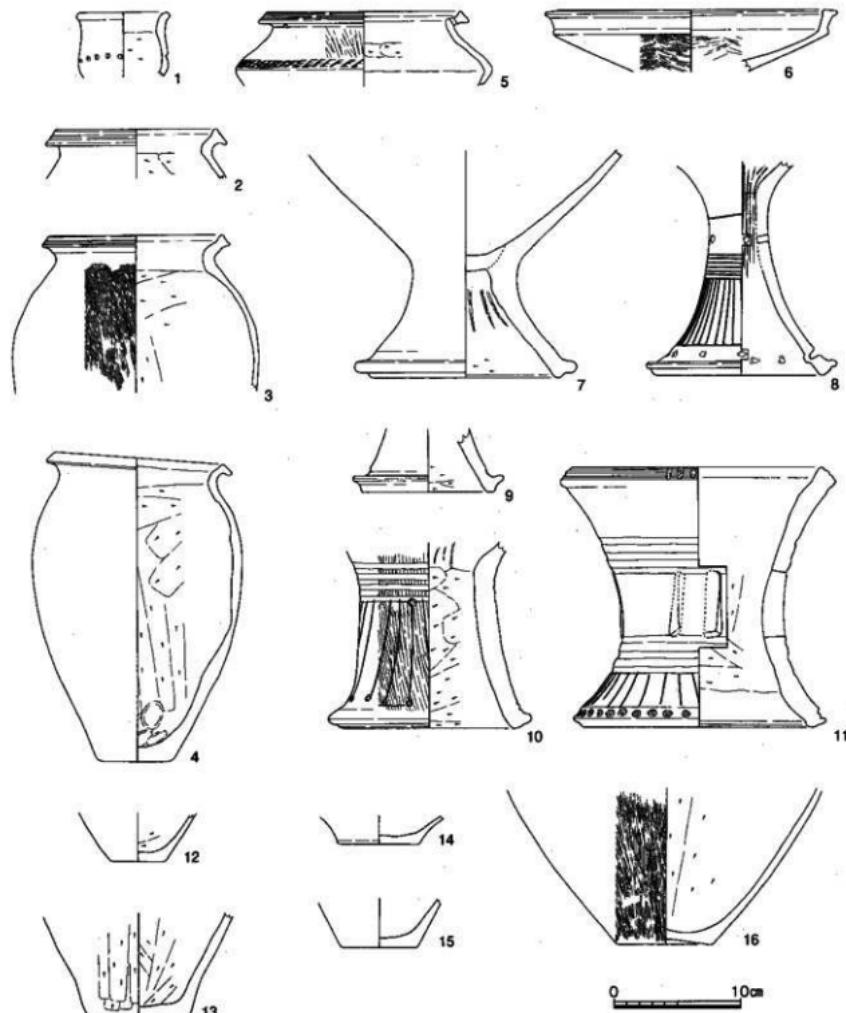
2~4は甕である。2・3の口縁端部には、それぞれ3条と2条の凹線が巡っており、4は全体的にひずみが大きく、粗



第32図 土坑実測図 (S=1/30)

雜なつくりである。5は台付鉢と思われる。胸部には、長さ1cm程度の小口部分を斜めに押し当てたような文様が密に施されている。また、口縁部内面から頸部外面へ向けて穿たれた焼成前の穿孔が、現状で3個確認できるが、位置的にみて2個一对のものが2箇所で、合計4個に復元できる。

6～9は高杯である。8の脚柱部及び脚裾部には、穿孔がそれぞれ4箇所と11箇所認められるが、



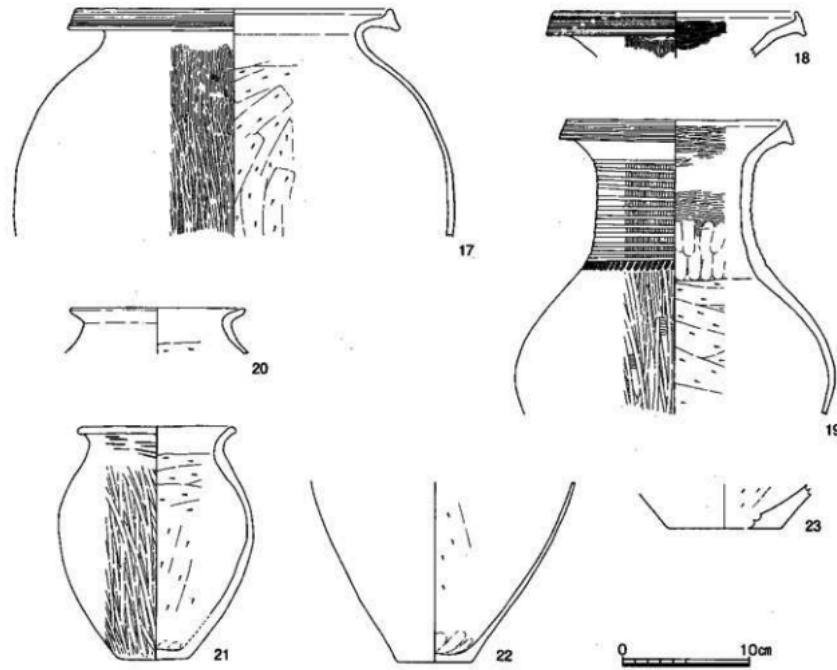
第33図 土坑3出土土器 (S=1/4)

そのうち2箇所と7箇所については裏側まで貫通していない。なお、脚柱部に見られる施文はヘラ描沈線文である。

10は、欠損部付近に充填された円盤がとれた痕跡が認められることから、鉢あるいは高壺の脚部と思われる。上部の形状は不明であるが、欠損部分の角度からそれほど大きく外へ開く形にはならないようである。脚柱部には幅広で浅い沈線が4条巡り、その最下段から、脚据部に配された個々の竹管文に向かってシャープなヘラ描沈線文が施されている。内面の調整は丁寧なヘラケズリで、外面にはハケの痕跡が残る。

11は器台で、胴部の径に比べ器高が低く、鼓形に近い形態となっている。胴部の透かしは、2個一対の長方形状を呈するものを4方向に配するデザインを意図したと思われるが、そのうち1箇所は1個のみの透かしとなっている。この透かしを挟んで、上下には幅広で浅い沈線がそれぞれ3条巡る。脚据部に配された竹管文と最下段の沈線文との間に、タテ方向のヘラ描沈線を施すのは10と共に通する手法であるが、11ではヘラ描沈線が個々の竹管文に対応していない。

12～16は壺・甌の底部である。器表面が摩耗しているものが多いが、13の外面は粗いヘラケズリ、16の外面には細かなハケの痕跡が残る。



第34図 土坑4出土土器 (S=1/4)

土坑3の時期は、出土した土器の特徴等から弥生時代後期初頭頃と考えられる。

土坑4

調査区中央部のやや南寄りで検出された。平面形は、 $80 \times 76\text{cm}$ のほぼ円形を呈し、検出面からの深さは 64cm を測る。壁面は、底面から直線状に立ち上がり、埋土は4層に区分できる。土層1~3は褐色を呈するが、第2層には灰が多く含まれている。底面近くからは、ほぼ完形の壺のほか比較的大きな破片の土器が出土している。

出土した遺物としては、弥生土器17~23のほかサヌカイト製の石包丁S1・S2がある。

17~19は壺である。17は、よく張った胴部と強く外反する口縁部を持つ大形の壺で、肥厚させた口縁端部には4条の凹線が巡る。器壁は薄く丁寧なつくりで、胎土も精良である。調整は、外面がタテ方向のハケののち、胴中央部以下にはヘラミガキを施している。18・19は長頸壺で、どちらも肥厚させた口縁端部には凹線を巡らす。19はほぼ直立する頸部に12条の浅い沈線を施し、胴部との境には刺突文を巡らしている。外面の調整は、頸部にタテ方向のハケ、胴部にタテ方向のヘラミガキを施している。内面は、口縁部がヘラミガキ、頸部がヨコハケ、胴部以下がヘラケズリである。

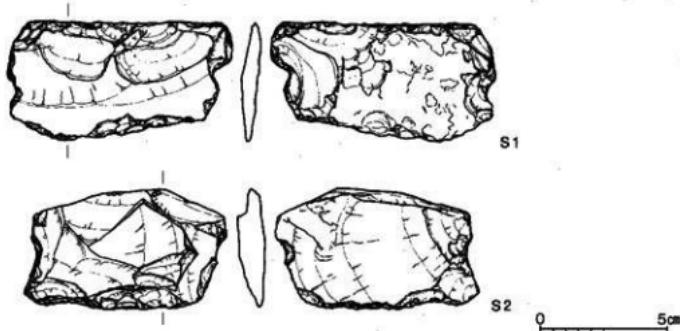
20・21は壺である。20は「く」の字に外反する口縁部を有し、その端部は肥厚せずそのまま丸く収めている。器表面の摩耗が激しく調整については明瞭ではないが、内面は頸部付近までヘラケズリを行っているようである。21は、口縁の一部を欠く以外は完形で出土した。「く」の字状に緩やかに開く口縁部を有し、その端部には特に調整を加えずそのまま収めている。外面には粗いヘラミガキを行っているものの、器表面には凸凹が目立つなど、全体的に粗雑なつくりである。

S1・S2は、サヌカイト製の石包丁である。S1は、長さ 4.71cm ・幅 8.97cm ・厚さ 0.95cm ・重量 44.4g を測る。背面には礫面が残り、使用痕が上下辺とともに認められる。S2は、長さ 4.74cm ・幅 7.98cm ・厚さ 1.08cm ・重量 58.2g を測る。刃部である下辺には、使用に伴う摩耗痕が認められる。

出土した弥生土器の特徴より、土坑4の時期は弥生時代後期初頭頃と考えられる。

土坑5

調査区南端近くで検出した。平面形は東西に長い楕円形を呈するが、西端は溝1により切られてい



第35図 土坑4出土石器 (S=1/2)

る。復元した検出面での大きさは75×96cmで、深さは17cmを測る。弥生土器の細片が少量出土しただけで土坑の時期を特定するものはないが、検出状況から考えて他の土坑とほぼ同じ時期と考えてよいだろう。

土坑6

調査区南端の西壁寄りで検出したもので、平面形は径90cm程の円形を呈する。検出面からの深さは76cmで、今回確認した土坑の中では最も深い。埋土は4層に分けられ、第2層の褐灰色粘質土には炭が多く含まれていた。また、最下層の青灰色シルト層からは多くの弥生土器片が出土した。

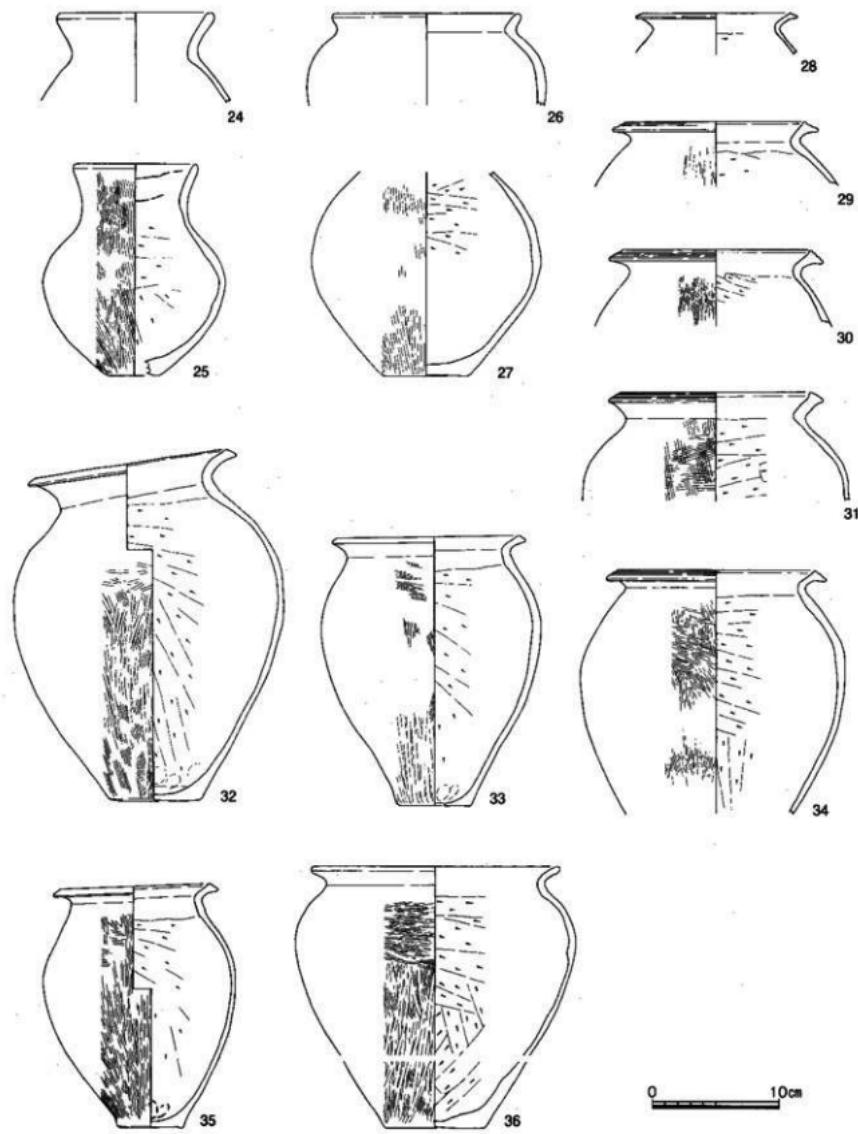
出土遺物は弥生土器のみで、そのうち図化できたのは28点である。

24～27は壺である。いずれもゆるく外反する口縁部の端は、そのまま丸く収めている。24・26は、胎土と色調が酷似している。どちらも器表面の磨滅が激しく、調整については明瞭ではないが、内面については頸部以下にヘラケズリを行っているようである。25は、ほぼ完形復元できた小形の壺で、玉葱形の胴部にややあげ底気味の底部をもつものである。器表面の磨滅は激しいが、外面全体にタテ方向のハケメが認められる。27は玉葱形を呈する胴部の破片で、外面の調整は粗いハケ、内面はヘラケズリである。

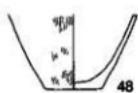
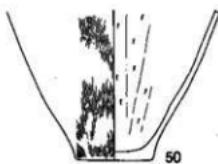
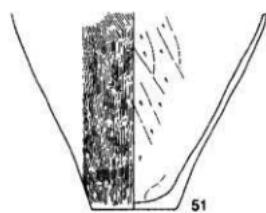
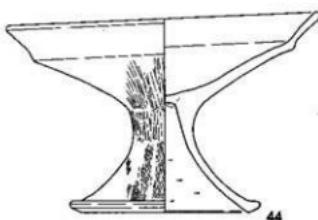
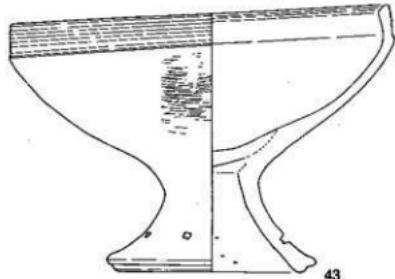
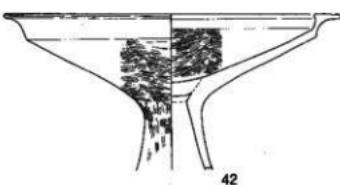
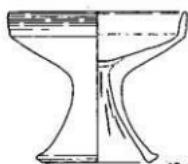
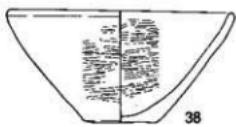
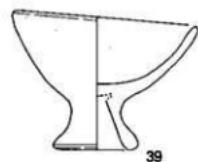
28～36は甕である。「く」の字形に外反する口縁部の端を、斜め下に少し肥厚させるものが多いが、ほとんど拡張しないもの（31）やそのまま丸く収めるもの（36）もある。肥厚させた口縁端部には浅い凹線が数条巡るようであるが、32・33・35については表面が荒れているため確認できない。外面調整はハケのものが多いが、胴下半部にヘラケズリを施すもの（33）や胴部全体をヘラミガキで仕上げているもの（32・36）などがある。内面調整は、全て頸部以下にヘラケズリを行っている。なお、33の底部には焼成後の穿孔が認められる。

37・38は鉢である。37は、頸部から強く屈曲して外方に開く口縁部をもち、その端には幅6mm程度の平坦面を有する。外面調整は、底部から頸部近くまでが横位のヘラミガキ、頸部より上にはヨコナデを行う。内面は、頸部付近に横位のヘラミガキが認められ、胴部はヘラケズリである。38は底部からほぼ直線的に開く形で、口縁端部は丸く収めている。器表面の磨滅が激しいが、内外面とも横位のヘラミガキの痕跡が残る。

39～45は高杯である。杯部の形や大きさから台付鉢と呼べるものもあるが、ここでは高杯とした。39は杯部が深めの楕形を呈するもので、口縁端部は丸く収めている。全体的にひずみが大きく、大きさの割に器壁が厚いなど粗雑な感が強い。杯部と脚部の接合は円盤充填による。40・43は、直立する口縁部を有し、40では2条、43では4条の凹線がみられる。43の口縁端部には浅い凹線が1条認められ、脚裾部には直径6mm程度の竹管文を配している。全体的に磨滅が激しく調整は不明瞭であるが、杯部外面にはヨコ方向のヘラミガキの痕跡が残る。41・42は、皿形の杯部から斜め上方へ立ち上がる口縁部の端を外方へ拡張するもので、その端面には数条の凹線が巡る。42の杯部内外面及び脚部外面にはヘラミガキを施す。44の口縁部は、皿形の杯部から斜め上方へ立ち上がり、その端部は丸くなっている。磨滅のため内面調整については明瞭でないが、外面については、脚柱部から皿部にかけては縦位のヘラミガキ、脚柱部以下にはタテハケを施している。脚裾部には穿孔は認められない。45は、脚部のみの破片であるが、径に比べ器壁の厚みが2mm弱で、非常に薄いつくりとなっている。



第36図 土坑6出土土器1 (S=1/4)



0 10cm

第37図 土坑6出土土器2 (S=1/4)

これら出土した弥生土器は、若干の時期幅が認められるものの、弥生時代後期前葉を中心とするものであり、土坑6の時期もこの年代に求められよう。

(3) 溝

2基の溝が検出された。溝1は、調査区の南西端からほぼ真北へ延びるもので、検出時の規模は、長さ約30m、幅50~60cmである。他の溝と同様、上部は削平され、浅い船底形を呈する底部のみが残る状態であった。溝2は、調査区南端部で検出されたもので、長さ約5.5m、幅約80cmを測る。溝1と同様、わずかに底部のみが残る状況で、方向は溝1と平行して南北に延びている。どちらの溝の埋土も灰色粘質土で、弥生土器及び中世土器の細片が含まれるが、図化できるものはなかった。これらの溝の時期は、出土遺物や埋土の状況等から中世と思われる。

(4) その他の遺物

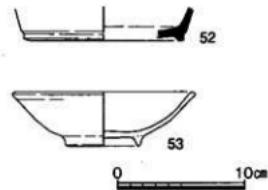
S2は、調査区北半の耕作土直下から出土した、須恵器の杯身である。底部の約1/6の破片で、推定高台径は11.7cmを測る。貼付けの高台はやや外側へ踏ん張り、断面形は角張った四角形を呈する。焼成は良好であるが、器表面の磨滅が激しく調整は不明瞭である。その特徴から奈良時代のものと思われる。S3は、調査区北東端で確認された土坑状の落ち込みから出土した、土師質の高台付楕である。復元口径13.8cm、高台径5.5cm、器高4.3cmを測る。体部は内外面ともナデ仕上げで、高台は断面が三角形を呈する。鎌倉時代後半のものと考えられる。

S3は、ピット9から出土したサヌカイト製の石核である。長さ4.31cm・幅6.48cm・厚さ1.68cm・重量39.2gを測る。打面側には疊面が残る。横長剥片を剥ぎ取ったもので、旧石器時代の遺物と考えられる。S4はサヌカイト製の石槍か石剣で、調査区東側の側溝用レンチから出土した。残存長8.92cm・幅3.79cm・厚さ0.9cm・重量39.2gを測る。基部を破損しているが、折損部につぶれが認められることから、折れた後も何らかの用途に使用されていたと考えられる。素材剥片面を残し、刃部調整は中央部まで達しない。

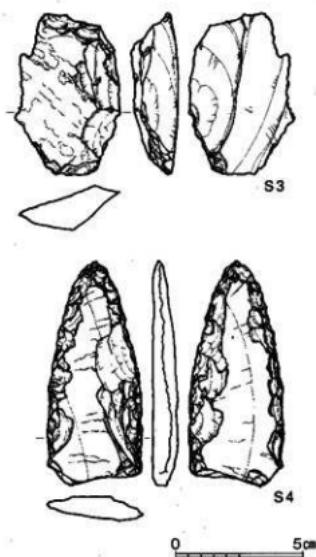
第3節 2区の調査

1. 調査区の概要

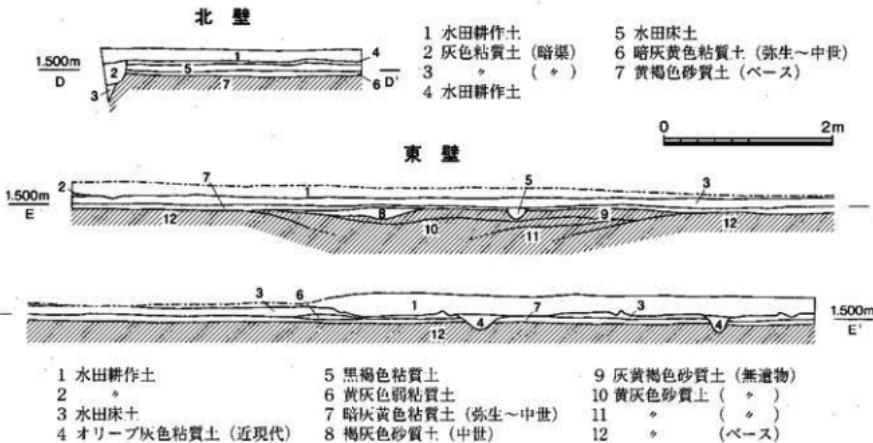
2区は、1区から農道及び用水路を挟んでその北側部分を範囲とし、東西約10m、南北約15mの三角形状をなす。調査面積は約103m²である。



第38図 その他の遺物1 (S=1/4)



第39図 その他の遺物2 (S=1/2)



第40図 2区北壁・東壁断面図 (S=1/60)

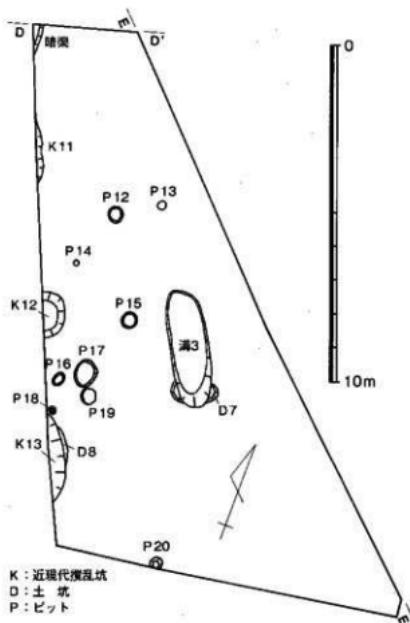
調査区の基本的土層は、上から水田耕作土・水田床土・暗灰黄色粘質土・黄褐色砂質土(ベース)となる。ベース直上の暗灰黄色粘質土には弥生～中世の遺物が含まれており、1区において後世の削平(水田の地下げ)に伴うと考えた灰褐色土あるいは青灰色土に相当すると思われる。1区のベース直上で確認された、弥生土器のみを含む土層は2区では確認できないが、これは2区におけるベースの標高が1.45mと1区に比べ15cm程高くなっているため、後世の削平により既に破壊を受けた結果と考えられる。

検出された遺構としては、ピット9基・土坑2基・溝1基があるが、1区と同様いずれも上部は削平され、遺構の底部のみが残存する状況であった。

2. 検出された遺構と遺物

(1) ピット

検出されたピットはピット12～20の9基で、大きさは直径15～80cm、深さは4～25cmである。これらのうち、ピット16～18・20からは弥生土器の細片が出土したが、図化できるものはなかった。ピット20からは弥生土器の他に土師質小皿



第41図 2区遺構配置図 (S=1/150)

(54) と土師質の高台付椀 (55) が出土した。これら中世の遺物は後世の削平時における混入と思われ、検出状況や埋土の状態などから考えて、2区で検出されたピットは1区と同様弥生時代に属すると思われる。

(2) 土坑・溝

2区からは、2基の土坑が検出された。

土坑7は調査区のほぼ中央で検出されたが、溝3により大部分が切り込まれており、残存状況は悪かった。検出時の大きさは、 $140 \times 70\text{cm}$ の楕円形を呈し、深さは13cmと浅かった。弥生土器の細片と土師質の高台付椀 (68) が出土しているが、溝3との切りあい関係から、土坑7は中世に属すると思われる。

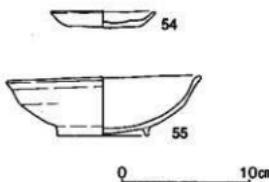
土坑8は、調査区南端近くの西壁にかかる形で検出された。上部は近現代の擾乱坑により破壊を受けており、検出時の大きさは南北115cm、西壁からの幅55cm、深さ40cmを測る。土坑の底は平坦で、北側へ向かって少し高くなっている。埋土は4層に分けられ、第2層の灰色砂質土からは、炭とともに弥生土器が多く出土した。

56・57は壺である。56は頸部より下を欠く小形の壺と思われ、ゆるく外反する口縁部の端には平坦面を形成し、ナデにより仕上げる。頸部外面にはタテ方向のハケメが明瞭に残る。57はよく張った胴部に「く」の字状に屈曲する口縁部を有し、その端は上方へ肥厚させ平坦面を作る。調整は、胴部外面上半はハケ、下半は横位のヘラミガキで、胴部内面はハケである。胴部外面には板状工具による刺突文が認められる。

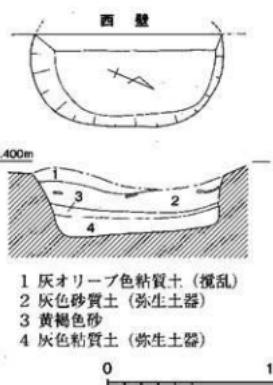
58~66は壺である。いずれも縦じて薄い器壁と胴部から「く」の字状に屈曲する口縁部をもち、屈曲部内面に明晰な稜線を有するもの (58・59・62・65・66) もある。口縁端部に平坦面をもつものが多く、わずかに上へ拡張するもの (60・62・65) もある。調整は、器表外面上半にハケ、下半にヘラミガキを行い、内面には丁寧なヘラミガキを施すものが多いが、60・66の内面にはハケメが認められる。58・61は2次焼成を受けたためか赤く変色し、一部剥離も認められる。器表面の荒れが激しいため、口縁端部にはもともと平坦面を有していた可能性がある。63の胴部に見られる刺突文は調整前に施文されたようで、ヘラミガキにより不明瞭となっている。66の胴部には、直径3mm程度の竹管文が、2段から3段密に配されている。

67は鉢である。台状を呈する底部に椀形の胴部をもち、口縁部はゆるやかに外反して端部はそのまま収める。全体的に器表面の凹凸が目立ち、底部と胴部の接合痕が明瞭に残るなど、粗雑なつくりである。器表外面にはヘラミガキ、内面にはハケメの痕跡が認められる。

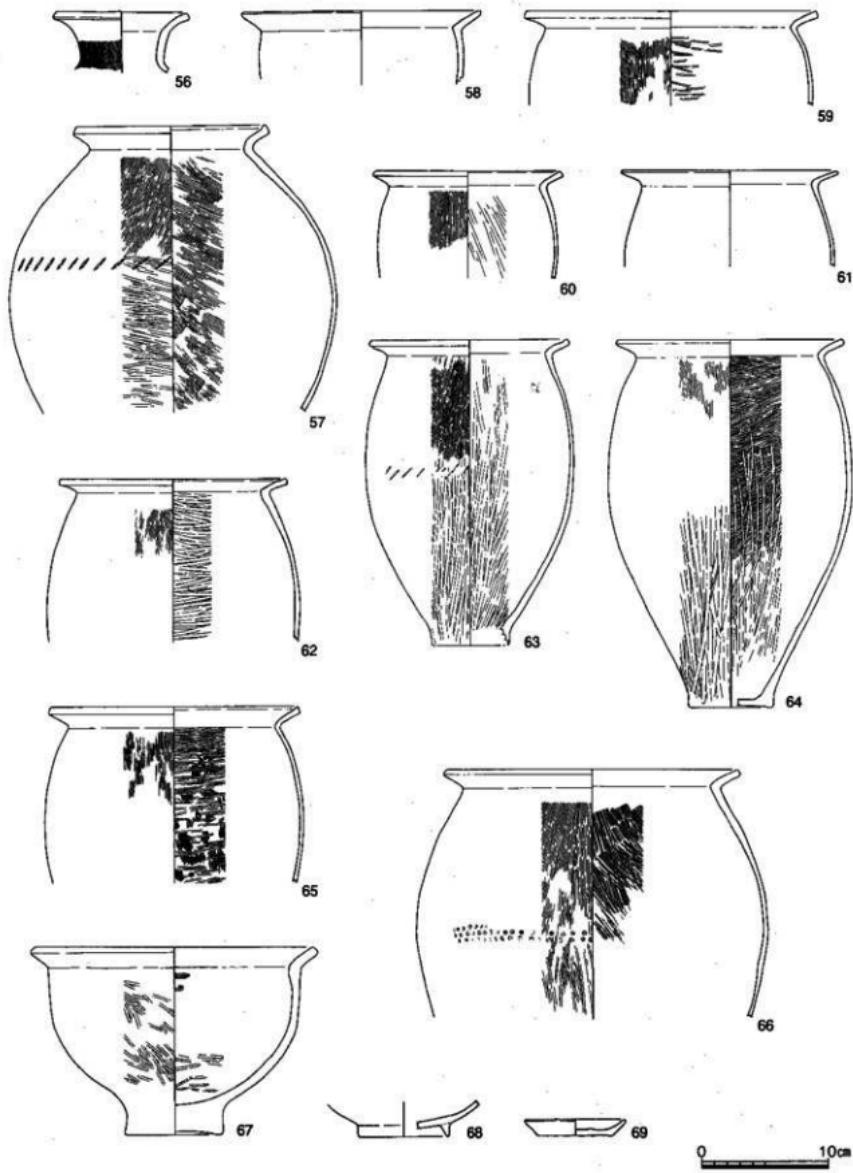
これら出土した土器の特徴により、土坑8の時期は弥生時代中期中葉頃と思われる。



第42図 ピット20出土土器 (S=1/4)



第43図 土坑8実測図 (S=1/30)



第44図 土坑7・8・溝3出土土器 (S=1/4)

溝は、調査区中央部から1基検出された。1区から検出された溝と同様、溝3も上部は削平を受け底部のみが残存する状況であった。検出時の規模は、長さ3.5m・幅1.1mで、深さは12cmである。褐色を呈する粘質の埋土からは、土師質小皿(69)のほか土師質器片が少量出土しており、溝3の時期は中世と思われる。

第4節まとめにかえて

今回の調査により検出された遺構は、弥生時代のピット20基・土坑7基、中世に属する土坑1基・溝3基であり、調査面積を考えれば遺構密度はそれほど高くないと言える。水田の地下げ等による後世の削平によりその上面が破壊を受けているとはいえ、遺構の下部構造が残存している状況を考えれば、この遺構密度の低さはもともとの遺跡の状況を表している可能性が高い。今回の調査地点は、岡山県教育委員会による過去3回の大規模な調査⁽¹⁾において確認した4つの微高地のうち、「下田所微高地」上にある。下田所微高地は、山陽新幹線あたりを南端とし北へ細長く延びる微高地で、上東遺跡最大の微高地といわれる「鬼川市微高地」とは旧河道1本隔てて西に位置している。弥生時代から中世にかけてのおびただしい遺構・遺物が検出された鬼川市微高地に比べ、下田所微高地から出土した遺物・遺構は少なく、今回の発掘調査の結果とも一致する。

上東遺跡からは、これまでに弥生時代から中世にかけての遺構が検出されているが、中心は弥生時代であり、その大半は中期後葉から後期にかけてのものである。それ以前にさかのほるものとしては、中期中葉のピットが1基確認されている⁽²⁾に過ぎなかったが、今回の調査では、このピットと同時期の土坑(土坑8)が2区で検出された。壺形土器片が数点出土したピットと違い、土坑8からは壺形土器を主として比較的まとまった量の土器が出土しており、上東遺跡における生活の痕跡は、確実に中期中葉までさかのほるとしてよいであろう。また、このピットと土坑8が、上東遺跡の中心部である鬼川市微高地ではなく、遺構密度の低い下田所微高地において確認されていることは、今後上東遺跡における集落の変遷と広がりを考えるうえで興味深いといえよう。

註

- (1) 岡山県教育委員会『山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 1974
岡山県教育委員会『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 1977
岡山県教育委員会『上東遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告158 2001
- (2) 岡山県教育委員会『IV上東遺跡』『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 1977

出土土器観察（一覧）表

1. 横内北窓跡群 1号

掲載番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・調整
			口径	底(脚)径	器高				
1	須恵器	坏蓋	(17.8)	-	3.9	やや不良	淡黄灰色	微砂粒	天井部外面ヘラ切り
2	須恵器	坏蓋	(18.0)	-	3.4	やや不良	淡茶褐色	微砂粒	天井部外面ヘラ切り
3	須恵器	坏蓋	(17.9)	-	2.3	やや不良	黃白色	微砂粒	天井部外面カキ目
4	須恵器	坏蓋	(17.8)	-	-	やや不良	淡乳白色	砂粒	天井部外面ヘラ切り
5	須恵器	坏蓋	(17.7)	-	-	やや不良	淡乳灰白色	微砂粒	天井部外面ヘラ切り
6	須恵器	坏蓋	(16.9)	-	-	やや不良	淡乳灰白色	砂粒	天井部外面カキ目ヘラケズリ
7	須恵器	坏蓋	(16.2)	-	2.9	不良	黃灰色	砂粒	天井部外面回転ヘラケズリ
8	須恵器	坏蓋	(15.2)	-	2.9	不良	淡茶褐色	微砂粒	天井部外面カキ目
9	須恵器	坏蓋	15.3	-	2.9	良好	灰白色	微砂粒	天井部外面カキ目
10	須恵器	坏蓋	(15.2)	-	3.1	不良	淡黃白色	砂粒	天井部外面ヘラ切り
11	須恵器	坏蓋	(15.1)	-	3.0	やや不良	淡黃灰色	砂粒	天井部外面カキ目
12	須恵器	坏蓋	14.5	-	2.9	やや不良	淡黃茶色	微砂粒	天井部外面カキ目
13	須恵器	坏蓋	(14.7)	-	3.0	やや不良	淡茶灰色	砂粒	天井部外面カキ目
14	須恵器	坏蓋	(14.7)	-	2.9	不良	淡茶褐色	微砂粒	天井部外面カキ目
15	須恵器	坏蓋	(14.9)	-	-	やや不良	淡茶褐色	微砂粒	天井部外面ヘラ切り
16	須恵器	坏蓋	(14.8)	-	2.7	不良	黃土色	微砂粒	天井部外面カキ目
17	須恵器	坏蓋	(14.5)	-	2.9	やや不良	淡黃茶色	砂粒	天井部外面カキ目
18	須恵器	坏蓋	-	-	-	不良	暗灰色	砂粒	外面部ヨコナデ
19	須恵器	坏身	17.2	10.6	6.1	良好	暗灰色	砂粒	外面部ヨコナデ
20	須恵器	坏身	(17.2)	(11.9)	5.7	良好	暗灰褐色	微砂粒	外面部ヨコナデ
21	須恵器	坏身	(16.8)	(11.2)	5.7	やや不良	淡黃土色	砂粒	外面部ヨコナデ
22	須恵器	坏身	(17.2)	-	-	不良	暗黃褐色	微砂粒	外面部ヨコナデ
23	須恵器	坏身	(16.2)	(11.4)	5.9	やや不良	淡茶褐色	微砂粒	外面部ヨコナデ
24	須恵器	坏身	(15.8)	(11.8)	6.1	やや不良	淡乳紫色	砂粒	外面部ヨコナデ
25	須恵器	坏身	-	(10.5)	-	やや不良	灰白色	砂粒	外面部ヨコナデ
26	須恵器	坏身	-	(11.8)	-	良好	淡灰白色	砂粒	外面部ヨコナデ
27	須恵器	坏身	-	10.9	-	やや不良	淡茶褐色	微砂粒	外面部ヨコナデ
28	須恵器	坏身	(14.3)	(8.9)	4.6	やや不良	淡褐色	砂粒	外面部ヨコナデ
29	須恵器	坏身	(14.6)	(10.1)	4.0	やや不良	淡黃土色	微砂粒	外面部ヨコナデ
30	須恵器	坏身	(14.4)	(10.5)	4.2	やや不良	黃土色	微砂粒	外面部ヨコナデ
31	須恵器	坏身	(14.4)	(10.7)	4.1	やや不良	黃茶色	微砂粒	外面部ヨコナデ
32	須恵器	坏身	(14.0)	(10.2)	3.8	やや不良	暗白色	砂粒	外面部ヨコナデ
33	須恵器	坏身	13.4	9.4	3.9	やや不良	暗灰黑色	砂粒	外面部ヨコナデ
34	須恵器	坏身	(13.4)	(10.1)	4.0	やや不良	淡黃土色	微砂粒	外面部ヨコナデ
35	須恵器	坏身	(13.4)	(9.5)	3.6	やや不良	淡乳白色	微砂粒	外面部ヨコナデ
36	須恵器	坏身	(13.0)	(9.8)	3.8	やや不良	淡黃土色	砂粒	外面部ヨコナデ
37	須恵器	坏身	(14.8)	(11.1)	4.1	やや不良	暗黃褐色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
38	須恵器	坏身	(14.3)	(8.5)	3.5	やや不良	淡茶褐色	砂粒	底部外面ヘラ切り
39	須恵器	坏身	(14.2)	(10.6)	3.4	良好	淡灰色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
40	須恵器	坏身	(14.1)	(11.1)	3.2	良好	淡灰白色	砂粒	底部外面ヘラ切り
41	須恵器	坏身	13.8	10.0	3.8	やや不良	茶褐色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
42	須恵器	坏身	(14.0)	(10.4)	3.8	やや不良	淡黃褐色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
43	須恵器	坏身	(13.6)	(9.8)	4.0	不良	淡乳褐色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
44	須恵器	坏身	13.8	9.6	3.7	良好	淡黃土色	砂粒	底部外面ヘラ切り
45	須恵器	坏身	(13.7)	(9.7)	3.4	やや不良	黃灰色	砂粒	底部外面ヘラ切り
46	須恵器	坏身	(13.6)	(9.6)	3.1	やや不良	淡黃土色	砂粒	底部外面ヘラ切り
47	須恵器	坏身	(13.6)	(8.3)	4.0	やや不良	暗灰色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
48	須恵器	坏身	(13.5)	(10.3)	4.0	やや不良	黃茶色	砂粒	底部外面ヘラ切り
49	須恵器	坏身	(13.2)	(9.1)	3.8	良好	淡灰白色	砂粒	底部外面ヘラ切り
50	須恵器	坏身	(13.6)	(8.7)	3.3	やや不良	淡茶褐色	砂粒	底部外面ヘラ切り
51	須恵器	坏身	13.0	9.6	3.5	不良	黑黃灰色	砂粒	底部外面ヘラ切り
52	須恵器	坏身	(13.6)	(9.3)	3.5	やや不良	淡乳白色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
53	須恵器	坏身	13.1	10.0	3.6	良好	淡灰白色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
54	須恵器	坏身	13.2	10.1	3.4	良好	黃白色	微砂粒	底部外面ヘラ切り

() は復元値

機器番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・調整
			口径	底(脚)径	高さ				
55	須恵器	壺身	(13.2)	(8.7)	3.5	やや不良	暗黒灰色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
56	須恵器	壺身	13.1	9.3	3.5	良好	灰白色	砂粒	底部外面ヘラ切り
57	須恵器	壺身	(12.8)	(7.8)	3.8	良好	淡灰色	砂粒	底部外面荒ナメ仕上げ
58	須恵器	壺身	(12.8)	(9.8)	3.5	良好	暗灰色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
59	須恵器	壺身	(12.6)	(9.1)	3.2	良好	淡青灰色	砂粒	底部外面ヘラ切り
60	須恵器	壺身	(12.5)	(7.3)	3.6	やや不良	灰白色	砂粒	底部外面ヘラ切り
61	須恵器	台付皿	(17.3)	(12.0)	3.9	良好	暗黒灰色	微砂粒	内外面ヨコナデ
62	須恵器	台付皿	(17.0)	(11.2)	3.8	良好	暗黒灰色	砂粒	内外面ヨコナデ
63	須恵器	台付皿	17.0	9.6	3.6	やや不良	淡灰白色	砂粒	内外面ヨコナデ
64	須恵器	台付皿	(16.8)	(10.3)	3.1	良好	暗黒灰色	微砂粒	内外面ヨコナデ
65	須恵器	台付皿	(17.8)	(11.6)	3.0	良好	暗灰色	砂粒	内外面ヨコナデ
66	須恵器	台付皿	(16.4)	(9.2)	3.3	良好	暗灰褐色	砂粒	内外面ヨコナデ
67	須恵器	皿	(19.1)	(16.7)	2.2	良好	暗灰白色	微砂粒	内外面ヨコナデ
68	須恵器	皿	(17.8)	(14.8)	-	良好	暗灰色	砂粒	底部外面ハラ切り
69	須恵器	皿	(16.2)	(13.0)	-	やや不良	淡茶灰色	微砂粒	底部外面ヘラ切り
70	須恵器	高杯	14.6	-	-	不良	暗灰褐色	砂粒	内外面指頭ナデ
71	須恵器	高杯	-	(10.7)	-	やや不良	灰白色	砂粒	内外面ヨコナデ
72	須恵器	高杯	-	11.7	-	やや不良	暗白灰色	微砂粒	内外面ヨコナデ
73	須恵器	高杯	-	8.6	-	やや不良	淡黄土色	砂粒	内外面ヨコナデ
74	須恵器	鉢	18.4	-	9.4	良好	淡黄土色	砂粒	体底部方キ目
75	須恵器	鉢	17.6	-	8.4	やや不良	淡乳白色	砂粒	体底部方キ目
76	須恵器	鉢	-	-	-	やや不良	暗乳褐色	砂粒	練割
77	須恵器	盃	-	-	-	良好	暗灰黄色	微砂粒	内外面ヨコナデ、自然輪
78	須恵器	盃	(13.6)	-	-	良好	暗紫灰色	微砂粒	天井部外面カキ目
79	須恵器	盃	(14.4)	-	-	やや不良	灰黄色	微砂粒	内外面ヨコナデ
80	須恵器	盃	8.8	-	2.3	良好	暗紫色	微砂粒	丹斯ヨコナデ、ハラ切り
81	須恵器	壺	(19.0)	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	内外面ヨコナデ
82	須恵器	壺	(15.1)	-	-	良好	暗灰褐色	砂粒	内外面ヨコナデ
83	須恵器	壺	(13.6)	-	-	良好	暗黒灰色	微砂粒	内外面ヨコナデ
84	須恵器	壺	(15.2)	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	内外面ヨコナデ
85	須恵器	壺	(14.3)	-	-	良好	暗灰色	微砂粒	内外面ヨコナデ
86	須恵器	壺	-	(6.8)	-	良好	暗黒灰色	微砂粒	体部外側方キ目
87	須恵器	壺	-	(11.5)	-	良好	淡青灰色	砂粒	体部外側方キ目
88	須恵器	壺	-	(12.6)	-	やや不良	暗土黄色	微砂粒	体部外側方キ目
89	須恵器	壺	-	(14.5)	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	内外面ヨコナデ
90	須恵器	瓶	(9.3)	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	内外面ヨコナデ
91	須恵器	瓶	10.1	-	-	良好	暗灰色	微砂粒	分割成形痕
92	須恵器	水瓶	7.1	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	内外面ヨコナデ
93	須恵器	水瓶	5.2	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	分割成形痕
94	須恵器	水瓶	5.2	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	内外面ヨコナデ
95	須恵器	瓶	-	12.6	-	やや不良	暗灰色	微砂粒	内外面ヨコナデ
96	須恵器	瓶	-	(10.7)	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	内外面ヨコナデ、外タキ
97	須恵器	平瓶	14.5	-	-	良好	黑色	微砂粒	内外面ヨコナデ
98	須恵器	平瓶	12.7	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	内外面ヨコナデ
99	須恵器	平瓶	13.7	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	内外面ヨコナデ
100	須恵器	平瓶	12.3	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	内外面ヨコナデ
101	須恵器	平瓶	-	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	提梁部、カキ目
102	須恵器	平瓶	(12.1)	15.7	16.5	良好	暗紫灰色	微砂粒	体部タキ後ヨコナデ
103	須恵器	平瓶	-	19.6	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	体部タキ後ヨコナデ
104	須恵器	平瓶	-	16.4	-	良好	黑灰色	微砂粒	体部タキ後ヨコナデ
105	須恵器	壺	(12.2)	-	-	良好	青灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
106	須恵器	壺	(14.2)	-	-	良好	青灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
107	須恵器	壺	(14.2)	-	-	良好	灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
108	須恵器	壺	(13.6)	-	-	良好	灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
109	須恵器	壺	(12.3)	-	-	良好	淡茶灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
110	須恵器	壺	(11.8)	-	-	良好	淡灰褐色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
111	須恵器	壺	(14.2)	-	-	良好	黑灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
112	須恵器	壺	(13.0)	-	-	良好	暗青灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
113	須恵器	壺	(13.6)	-	-	良好	青灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
114	須恵器	壺	(16.4)	-	-	良好	暗灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ

()は復元値

揭露番号	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴・調整
			口径	底(脚)径	器高				
115	須恵器	壺	(18.7)	-	-	良好	青灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ 縁部平行、同心円タタキ
116	須恵器	壺	(17.8)	-	-	良好	暗灰色	微砂粒	縁部平行、同心円タタキ
117	須恵器	壺	(23.2)	-	-	良好	灰褐色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
118	須恵器	壺	(17.4)	-	-	良好	淡褐色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
119	須恵器	壺	(20.9)	-	-	やや不良	淡灰色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
120	須恵器	壺	(22.2)	-	-	良好	淡褐色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
121	須恵器	壺	(19.5)	-	-	良好	暗灰黄色	微砂粒	体部タタキ、ヨコナデ
122	須恵器	壺	(19.7)	-	-	不良	灰褐色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
123	須恵器	壺	(19.7)	-	-	やや不良	黄灰色	砂粒	体部タタキ後ヨコナデ
124	須恵器	壺	(34.0)	-	-	不良	青灰色	砂粒	体部平行、ヨコナデ
125	須恵器	壺	(33.2)	-	-	不良	黄灰色	砂粒	体部タタキ、ヨコナデ
126	須恵器	壺	(35.6)	-	-	空不良	淡黃褐色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
127	須恵器	壺	27.7	-	-	良好	暗灰褐色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
128	須恵器	壺	31.5	-	-	やや不良	黄褐色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
129	須恵器	壺	(37.7)	-	-	良好	暗灰色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
130	須恵器	壺	(39.4)	-	-	良好	暗青褐色	微砂粒	縫接合部カヌ目
131	須恵器	壺	(33.4)	-	-	良好	暗灰色	微砂粒	縫接合部タタキ目
132	須恵器	壺	34.2	-	-	良好	暗褐色	微砂粒	縫接合部カヌ目
133	須恵器	壺	(36.6)	-	-	良好	淡灰色	砂粒	外面ヨコナデ
134	須恵器	壺	(37.8)	-	-	良好	淡灰色	微砂粒	縫接合部タタキ目
135	須恵器	壺	(38.0)	-	-	やや不良	淡灰色	微砂粒	縫接合部カヌ目
136	須恵器	壺	(38.6)	-	-	良好	暗青褐色	砂粒	縫接合部カヌ目
137	須恵器	壺	(51.8)	-	-	良好	暗灰色	砂粒	縫接合部タタキ目
138	須恵器	壺	(52.0)	-	-	良好	灰色	砂粒	口縁部内外面ヨコナデ
139	須恵器	壺	(66.2)	-	-	良好	灰色	砂粒	縫接合部タタキ目
140	須恵器	壺	-	10.2	-	不良	淡灰白色	砂粒	外側タタキ、指痕压痕
141	須恵器	壺	-	11.1	-	やや不良	黄土色	微砂粒	体部タタキ、内面ヨコナデ
142	須恵器	壺	-	-	-	良好	黑褐色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
143	須恵器	壺	-	11.5	-	良好	灰色	微砂粒	底部外側カヌ目
144	須恵器	壺	-	(21.4)	-	良好	黑褐色	砂粒	内面ヨコナデ
145	須恵器	壺	-	(21.9)	-	不良	淡黄灰色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
146	須恵器	壺	-	(23.1)	-	良好	暗灰色	微砂粒	体部平行、同心円タタキ
147	須恵器	骨蔵器?	-	-	-	不良	暗灰色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
148	須恵器	骨蔵器?	-	-	-	不良	暗褐色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
149	須恵器	骨蔵器?	-	-	-	不良	暗灰褐色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
150	須恵器	骨蔵器?	-	-	-	不良	暗褐色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
151	須恵器	骨蔵器?	-	-	-	不良軟質	暗灰褐色	砂粒	円孔、ナデ
152	須恵器	骨蔵器?	-	-	-	不良軟質	暗褐色	砂粒	体部平行、同心円タタキ
153	須恵器	骨蔵器?	-	-	-	不良軟質	暗褐色	砂粒	底部外側カヌ目
154	須恵器	壺	-	20.4	-	良好	暗灰色	砂粒	外側平行タタキ、ナデ
155	須恵器	不明	-	-	-	良好	暗灰色	砂粒	外面カヌ目、内面ナデ
156	須恵器	不明	-	-	-	良好堅致	暗褐色	砂粒	外面カヌ目、内面ナデ
157	須恵器	不明	-	-	-	良好堅致	暗灰色	砂粒	外面カヌ目、内面ナデ
158	須恵器	不明	-	-	-	良好堅致	暗灰色	砂粒	外面カヌ目、内面ナデ

() は復元値

2. 下庄遺跡

揭露番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴
				口径	底(脚)径	器高				
1	土坑6	弥生土器	長頸壺	18.0	-	-	良好	浅黄色	砂粒	頭部沈線
2	土坑6	弥生土器	瓶類	(18.2)	-	-	良好	浅褐色	砂粒	頭部沈線
3	土坑6	弥生土器	壺	(17.0)	-	-	良好	にぶい黄色	砂粒	頭部沈線
4	土坑6	弥生土器	壺	(17.0)	-	-	良好	にぶい褐色	砂粒	頭部沈線
5	土坑6	弥生土器	壺	(17.8)	-	-	良好	橙色	砂粒	頭部沈線
6	土坑6	弥生土器	壺	(19.6)	-	-	良好	褐色	砂粒	頭部沈線
7	土坑6	弥生土器	壺	(19.6)	-	-	良好	にぶい黄色	砂粒	外面黒斑
8	土坑6	弥生土器	-	-	(6.6)	-	良好	黄褐色	砂粒	外面黒斑付着

() は復元値

標 番 号	出土位置	種 別	器 種	法量(cm)			焼成	色 調	胎土	特 徴
				口径	底(脚)径	器高				
9	十坑 6	弥生土器	高杯	-	-	-	良好	橙色	微砂粒	外面黒斑
10	土坑 6	弥生土器	高杯	-	(10)	-	良好	所調色	微砂粒	外面に斜面文、脚部に
11	十坑 6	弥生土器	高杯	-	11.4	-	良好	にぶい黄褐色	微砂粒	脚部に円形透し孔 4
12	包含層	弥生土器	器台	13.0	-	-	良好	赤褐色	砂粒	白練外壁に菱形文様
13	包含層	弥生土器	壺	(11.4)	-	-	良好	明赤褐色	砂粒	
14	包含層	弥生土器	壺	17.6	-	-	良好	褐色	砂粒	
15	包含層	弥生土器	壺	(16.7)	-	-	良好	にぶい黄褐色	砂粒	
16	包含層	弥生土器	壺	(21.7)	-	-	良好	褐色	砂粒	
17	包含層	弥生土器	空	(20.6)	-	-	良好	橙色	砂粒	
18	包含層	弥生土器	壺	(18.9)	-	-	良好	にぶい橙色	砂粒	
19	包含層	弥生土器	壺	(13.0)	-	-	良好	にぶい黄褐色	砂粒	内外面黒斑
20	包含層	弥生土器	壺	(14.4)	-	-	良好	にぶい褐色	砂粒	
21	包含層	弥生土器	壺	(14.4)	-	-	良好	にぶい橙色	砂粒	
22	包含層	弥生土器	壺	(17.0)	-	-	良好	浅褐色	砂粒	
23	包含層	弥生土器	壺	(15.4)	-	-	良好	明赤褐色	砂粒	
24	包含層	弥生土器	壺	(14.2)	-	-	良好	明赤褐色	砂粒	
25	包含層	弥生土器	壺	(16.0)	-	-	良好	浅黄色	砂粒	外面黒斑
26	包含層	弥生土器	壺	(17.0)	-	-	良好	明赤褐色	砂粒	
27	包含層	弥生土器	壺	(14.7)	-	-	良好	橙色	砂粒	
28	包含層	弥生土器	壺	(18.6)	-	-	良好	浅褐色	砂粒	内外面黒斑
29	包含層	弥生土器	壺	(14.2)	-	-	良好	にぶい黄褐色	砂粒	内外面黒斑
30	包含層	弥生土器	壺	(15.4)	-	-	良好	褐色	砂粒	内外面黒斑
31	包含層	弥生土器	壺	(16.2)	-	-	良好	にぶい黄褐色	砂粒	
32	包含層	弥生土器	壺	(12.4)	-	-	良好	灰褐色	砂粒	
33	包含層	弥生土器	壺	(14.8)	-	-	良好	橙色	砂粒	
34	包含層	弥生土器	壺	(16.0)	-	-	良好	細溝の褐色	砂粒	
35	包含層	弥生土器	壺	(12.4)	-	-	良好	明赤褐色	砂粒	
36	包含層	弥生土器	壺	-	8.0	-	良好	浅褐色	砂粒	外面黒斑
37	包含層	弥生土器	壺	-	4.7	-	良好	にぶい黄褐色	砂粒	外面黒斑
38	包含層	弥生土器	壺	-	4.6	-	良好	細溝の褐色	砂粒	外面黒斑
39	包含層	弥生土器	壺	-	(6.0)	-	良好	橙色	砂粒	外面黒斑
40	包含層	弥生土器	壺	-	(5.4)	-	良好	細溝の褐色	砂粒	外面黒斑
41	包含層	弥生土器	壺	-	4.6	-	良好	にぶい赤褐色	砂粒	外面黒斑
42	包含層	弥生土器	壺	-	(6.0)	-	良好	にぶい赤褐色	砂粒	内外面黒斑
43	包含層	弥生土器	壺	-	(6.8)	-	良好	明赤褐色	砂粒	外面黒斑
44	包含層	弥生土器	壺	-	(7.8)	-	良好	細溝の褐色	砂粒	外面黒斑
45	包含層	弥生土器	壺	-	3.5	-	良好	明赤褐色	砂粒	
46	包含層	弥生土器	壺	-	(4.7)	-	良好	細溝の褐色	砂粒	外面黒斑
47	包含層	弥生土器	高杯	(16.7)	-	-	良好	にぶい黄褐色	砂粒	内外面黒斑
48	包含層	弥生土器	高杯	(19.3)	-	-	良好	褐色	砂粒	
49	包含層	弥生土器	高杯	(19.2)	-	-	良好	にぶい黄褐色	微砂粒	
50	包含層	弥生土器	高杯	(12.2)	-	-	良好	浅褐色	微砂粒	
51	包含層	弥生土器	高杯	11.4	-	-	良好	橙色	砂粒	
52	包含層	弥生土器	高杯	-	-	-	良好	橙色	砂粒	
53	包含層	弥生土器	高杯	-	-	-	良好	橙色	砂粒	
54	包含層	弥生土器	高杯	-	-	-	良好	橙色	微砂粒	杯部底に穿孔
55	包含層	弥生土器	高杯	-	-	-	良好	明赤褐色	砂粒	
56	包含層	弥生土器	高杯	-	-	-	良好	にぶい褐色	砂粒	
57	包含層	弥生土器	高杯	-	10.5	-	良好	浅黄色	砂粒	脚部に円形透し孔 4
58	包含層	弥生土器	高杯	-	(8.6)	-	良好	にぶい褐色	砂粒	杯底底に穿孔
59	包含層	弥生土器	高杯	-	(10.9)	-	良好	にぶい黄褐色	砂粒	脚部に円形透し孔 4
60	包含層	弥生土器	高杯	-	-	9.2	良好	明赤褐色	砂粒	
61	包含層	弥生土器	鉢	(28.0)	-	-	良好	橙色	砂粒	内外面黒斑
62	包含層	弥生土器	鉢	(23.2)	-	-	良好	にぶい黄褐色	砂粒	外面黒斑
63	包含層	弥生土器	鉢	13.3	3.5	8.5	良好	橙色	砂粒	
64	包含層	弥生土器	壺	7.0	4.0	7.8	良好	にぶい褐色	砂粒	手縫ねじ口
65	包含層	弥生土器	壺	-	7.5	-	良好	赤褐色	砂粒	
66	包含層	弥生土器	壺	-	(5.0)	-	良好	にぶい褐色	砂粒	
67	包含層	弥生土器	壺	-	9.0	-	良好	橙色	砂粒	脚部に円形透し孔 5
68	包含層	弥生土器	壺	-	10.8	-	良好	橙色	砂粒	内面黒斑

() は復元値

3. 上東遺跡

掲載番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)			焼成	色調	胎土	特徴
				口径	底(脚)径	器高				
1	土坑3	弥生土器	壺	(6.8)	-	-	良好	にぶい黄褐色	砂粒	竹管文
2	土坑3	弥生土器	甌	(12.6)	-	-	良好	にほい黄褐色	砂粒	
3	土坑3	弥生土器	甌	13.6	-	-	良好	褐色	砂粒	
4	土坑3	弥生土器	甌	13.2	5.5	24.5	やや不良	赤褐色	砂粒	
5	土坑3	弥生土器	台付鉢	15.2	-	-	良好	橙色	砂粒	頭部に穿孔
6	土坑3	弥生土器	丼	(21.0)	-	-	良好	暗赤褐色	砂粒	
7	土坑3	弥生土器	高杯	-	17.5	-	良好	赤	砂粒	
8	土坑3	弥生土器	高杯	-	13.2	-	良好	褐色	砂粒	黒縁・ハラ拂沈線
9	土坑3	弥生土器	高杯	-	(10.4)	-	良好	灰褐色	砂粒	
10	土坑3	弥生土器	高杯	-	13.4	-	良好	褐色	微砂粒	竹管文
11	土坑3	弥生土器	器台	(19.6)	18.2	20.5	良好	明赤褐色	砂粒	竹管文・棒状浮文
12	土坑3	弥生土器	高杯	-	(4.2)	-	良好	黄褐色	微砂粒	
13	土坑3	弥生土器	-	-	7.2	-	良好	赤褐色	砂粒	
14	土坑3	弥生土器	-	-	6.4	-	良好	茶褐色	砂粒	
15	土坑3	弥生土器	-	-	(6.0)	-	良好	明赤褐色	砂粒	
16	土坑3	弥生土器	-	-	7.4	-	良好	暗赤褐色	微砂粒	
17	土坑4	弥生土器	壺	(24.7)	-	-	良好	橙色	砂粒	黒斑
18	土坑4	弥生土器	長頸壺	(19.0)	-	-	良好	明赤褐色	微砂粒	
19	土坑4	弥生土器	長頸壺	17.3	-	-	良好	明赤褐色	砂粒	
20	土坑4	弥生土器	甌	(13.6)	-	-	良好	明赤褐色	微砂粒	
21	土坑4	弥生土器	甌	11.8	5.6	19.2	良好	暗茶褐色	砂粒	黒斑
22	土坑4	弥生土器	甌	-	6.0	-	良好	黑褐色	砂粒	
23	土坑4	弥生土器	-	-	(9.0)	-	良好	明赤褐色	砂粒	
24	土坑6	弥生土器	壺	12.0	-	-	やや不良	明赤褐色	微砂粒	
25	土坑6	弥生土器	壺	9.5	(4.0)	17.0	良好	茶褐色	微砂粒	黒斑
26	土坑6	弥生土器	壺	(14.6)	-	-	やや不良	明赤褐色	微砂粒	
27	土坑6	弥生土器	壺	-	-	-	良好	にぶい橙色	砂粒	黒斑
28	土坑6	弥生土器	甌	(11.6)	-	-	良好	明赤褐色	砂粒	
29	土坑6	弥生土器	甌	(14.0)	-	-	良好	茶褐色	砂粒	
30	土坑6	弥生土器	甌	14.8	-	-	良好	明赤褐色	微砂粒	
31	土坑6	弥生土器	甌	14.8	-	-	良好	橙色	砂粒	
32	土坑6	弥生土器	甌	15.1	4.2	28.0	良好	褐色	砂粒	黒斑
33	土坑6	弥生土器	甌	(14.3)	6.0	21.4	良好	茶褐色	砂粒	
34	土坑6	弥生土器	甌	15.4	-	-	良好	明赤褐色	砂粒	黒斑
35	土坑6	弥生土器	甌	(11.8)	5.2	19.4	良好	茶褐色	砂粒	黒斑
36	土坑6	弥生土器	甌	(19.0)	7.5	20.6	良好	暗茶褐色	砂粒	黒斑
37	土坑6	弥生土器	鉢	(16.0)	-	-	良好	明茶褐色	砂粒	
38	土坑6	弥生土器	鉢	17.4	5.8	9.0	良好	橙色	微砂粒	黒斑
39	土坑6	弥生土器	高杯	14.3	5.2	11.0	やや不良	淡赤褐色	砂粒	
40	土坑6	弥生土器	高杯	(13.8)	8.3	12.0	良好	褐色	砂粒	
41	土坑6	弥生土器	高杯	(25.6)	-	-	良好	淡茶褐色	微砂粒	黒斑
42	土坑6	弥生土器	高杯	24.4	-	-	良好	にほい茶褐色	砂粒	
43	土坑6	弥生土器	高杯	29.7	14.2	21.2	良好	橙色	砂粒	竹管文
44	土坑6	弥生土器	高杯	24.2	13.1	16.0	良好	にぶい橙色	砂粒	
45	土坑6	弥生土器	高杯	-	12.5	-	良好	にぶい橙色	砂粒	
46	土坑6	弥生土器	高杯	-	(5.8)	-	良好	明黄褐色	砂粒	
47	土坑6	弥生土器	-	-	4.9	-	良好	暗茶灰色	微砂粒	
48	土坑6	弥生土器	-	-	4.7	-	良好	淡茶褐色	砂粒	
49	土坑6	弥生土器	-	-	6.0	-	良好	淡茶褐色	砂粒	黒斑
50	土坑6	弥生土器	-	-	6.0	-	良好	暗茶褐色	砂粒	
51	土坑6	弥生土器	-	-	6.5	-	良好	茶褐色	微砂粒	黒斑
52	土坑6	彌意器	杯身	-	(11.7)	-	良好	灰白色	砂粒	點付高台
53	18之跡から	土器質土器	椀	(13.8)	5.5	4.3	良好	浅黄褐色	砂粒	貼付高台
54	ビット20	土器質土器	小皿	8.0	5.2	1.4	良好	灰褐色	砂粒	
55	ビット20	土器質土器	椀	14.9	7.0	4.8	良好	浅黄褐色	砂粒	貼付高台
56	土坑8	弥生土器	甌	10.2	-	-	良好	茶褐色	微砂粒	
57	土坑8	弥生土器	甌	(14.7)	-	-	良好	橙色	砂粒	刺突文
58	土坑8	弥生土器	甌	(18.4)	-	-	良好	明赤褐色	粗砂粒	2次焼成?

() は復元値

捲載 番号	出土位置	種別	器種	法量(cm)			焼成	色 調	胎土	特 徴
				口径	底(脚)径	器高				
59	土坑 8	弥生土器	甕	(22.8)	-	-	良好	淡茶褐色	砂粒	
60	土坑 8	弥生土器	甕	(14.4)	-	-	良好	浅茶褐色	砂粒	
61	土坑 8	弥生土器	甕	(16.8)	-	-	良好	明赤褐色	粗砂粒	2次焼成?
62	土坑 8	弥生土器	甕	(17.7)	-	-	良好	茶褐色	微砂粒	刺突文
63	土坑 8	弥生土器	甕	(15.4)	-	-	やや不良	灰白色	砂粒	
64	土坑 8	弥生土器	甕	(17.6)	(62)	29.3	良好	にぶい橙色	砂粒	
65	土坑 8	弥生土器	甕	(19.4)	-	-	良好	にぶい橙色	砂粒	黒斑
66	土坑 8	弥生土器	甕	(22.0)	-	-	良好	赤褐色	砂粒	
67	土坑 8	弥生土器	鉢	(21.8)	15.1	73	やや不良	暗灰褐色	粗砂粒	
68	土坑 7	土師質土器	鉢	-	(7.0)	-	良好	浅黄褐色	微砂粒	貼付窓口
69	溝 3	土師質土器	小皿	(7.9)	(5.8)	13	良好	浅黄褐色	砂粒	

() は復元値

図 版



図版 2 横内北窯跡群 1号



1. 溝状造構（東から）



2. 落ち込み（東から）



3. 灰原断面（東から）



2



7



10



19



21



24



28



32



33



37



42



51



61



64



67



70



71



73

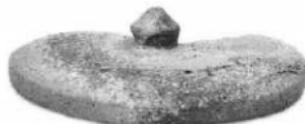
図版 4 横内北窯跡群 1 号 出土遺物 (2)



75



76



80



98



91



101



102



113



118



121

126



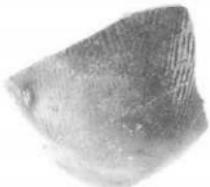
124



130



137



142



146



147



148



153



155



158



156



157

図版 6 横内北窯跡群 1号 出土遺物 (4)



159

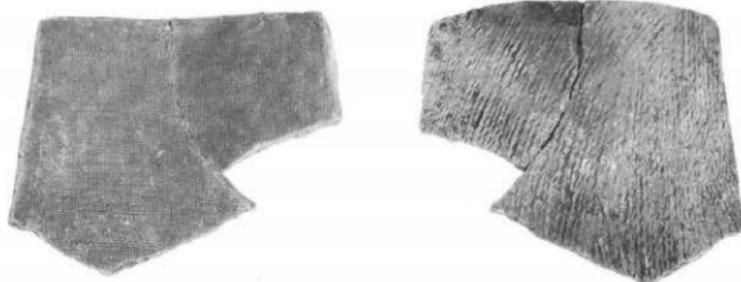


161

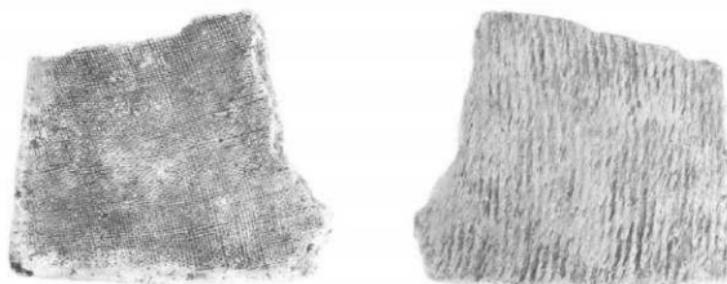


162

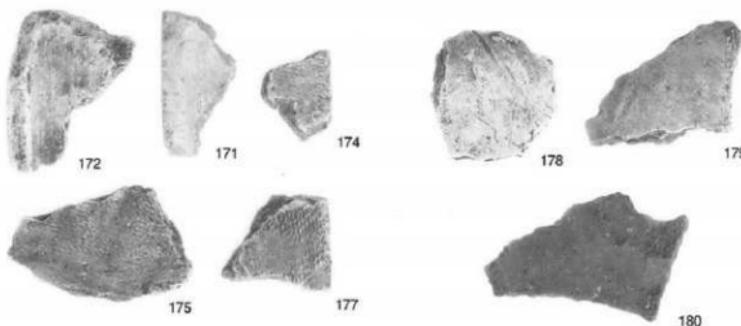
163



164



169



172

171

174

178

179

175

177

180

図版 8 下庄遺跡



1. 調査区東半部(西から)



2. 調査区西端部(東から)



3. 調査区西端部南壁

1. 土坑4



2. 土坑5



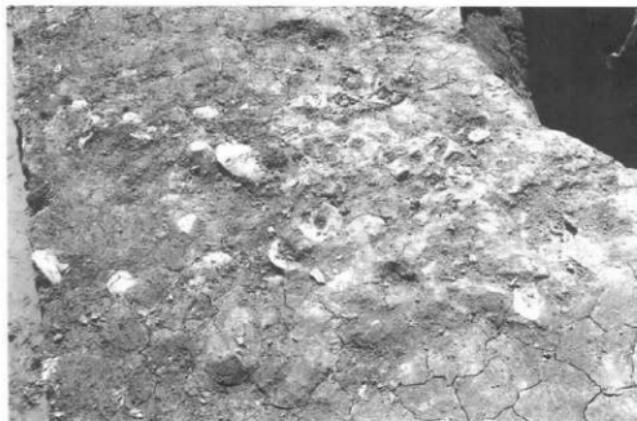
3. 土坑6



図版 10 下庄遺跡



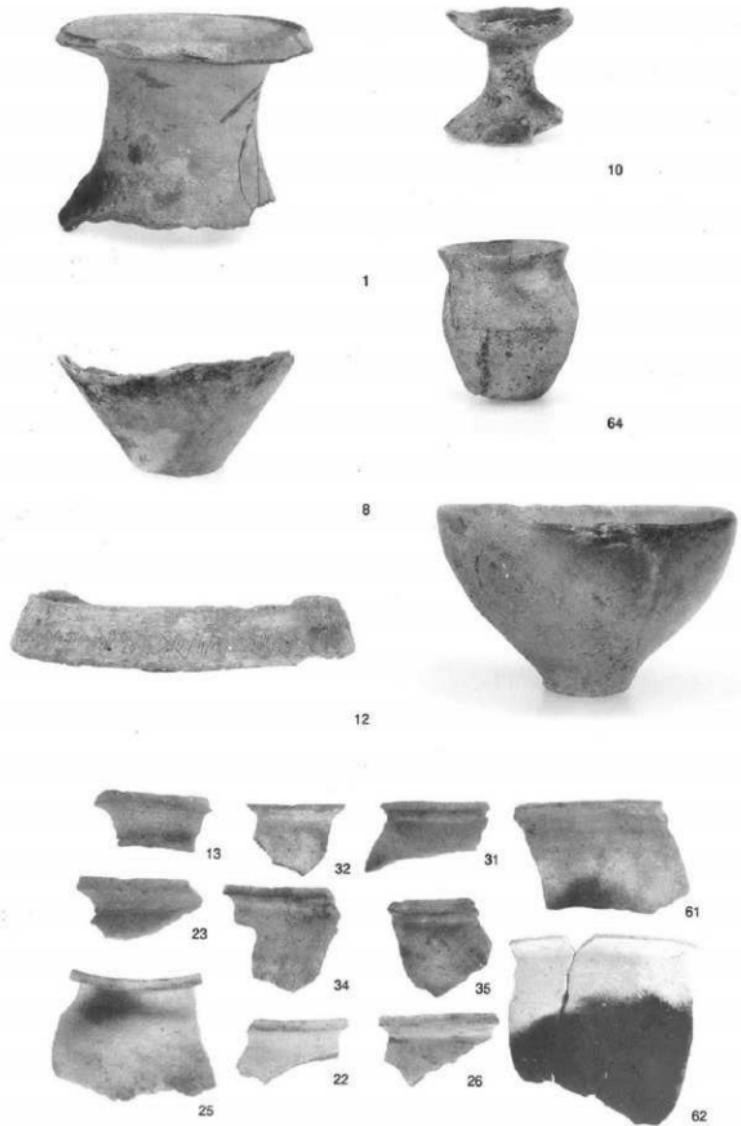
1. 土坑 7・8



2. 包含層土器出土状況



3. 作業風景



図版 12 上東遺跡



1. 1区全景（南から）



2. 1区全景（北西から）



3. 1区北壁

1. 1区東壁北半



2. 1区東壁南半



3. 土坑3



図版 14 上東遺跡



1. 土坑4



2. 土坑6



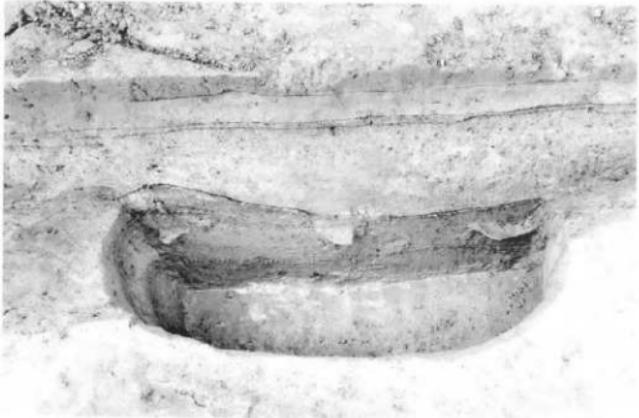
3. 2区全景(南から)



1. 2区北壁



2. 2区東壁



3. 土坑8

図版 16 上東遺跡 出土遺物 (1)



4



10



3



8



21



25



11



19



33



35



31



37



38



32



39



40



44



43

図版 18 上東遺跡 出土遺物 (3)



53



54



55



69



62



59



63



65



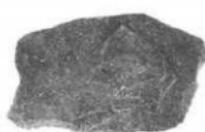
66



64



S 1



S 2



S 4



S 3

報告書抄録

ふりがな	よこうちきたかまとぐんいちごう しもしょういせき じょうとういせき
書名	横内北窯跡群1号 下庄遺跡 上東遺跡
副書名	
卷次	
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第12集
編著者名	福本明・鍵谷守秀・小野雅明
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター
所在地	〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地 Tel.086-454-0600
発行年月日	平成19年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横内北窯跡群1号	おかやまけんくらしき市 岡山県倉敷市 玉島陶	33202	05-001	34° 34' 48"	133° 39' 13"	19850225～ 19850301	15 m ²	農道建設工事
下庄遺跡	おかやまけんくらしき市 岡山県倉敷市 下庄	33202	04-045	34° 38' 27"	133° 50' 09"	20000704～ 20000731	106 m ²	道路建設工事
上東遺跡	おかやまけんくらしき市 岡山県倉敷市 上東	33202	01-221	34° 38' 51"	133° 49' 51"	20001107～ 20001207	290 m ²	道路建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
横内北窯跡群1号	窯跡	奈良時代	灰原	須恵器・瓦	
下庄遺跡	集落跡	弥生時代	土坑	弥生土器	
上東遺跡	集落跡	弥生時代	土坑・ピット・溝	弥生土器・中世土器	

印刷仕様

紙 質 表紙：サンマット 160kg (PP 張り)
本文：書籍用紙 65kg
図版：マットアート 110kg

編 集 Mac OS 10.2.8 Adobe InDesign 2.0 Adobe Photoshop7.0

使用フォント モリサワ OpenType フォント
(リュウミン L-KL・中ゴシック BBB・太ミン A101・
太ゴ B101・見出ゴ MB31)

製 本 無線綴じ

**倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第12集
横内北窯跡群1号 下庄遺跡 上東遺跡**

平成19年3月31日印刷発行

発 行 倉敷市教育委員会

編 集 倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 倉敷市福田町古新田940番地

Tel.086-454-0600

The Excavation Report
Of
Yokouchikita No.1 Kiln Site Shimosho Site Joutou Site

Volume 12

Kurashiki
Archaeological Center

March 2007